
I S インフィニット・ストラトス ——白の後継者——

ホーエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス —— 白の後継者 ——

【Nコード】

N9179S

【作者名】

ホーエン

【あらすじ】

——すべての始まりはある人物の決断からだった。

少女は世界を背負い、少年は世界から非情な決断を迫られ、少年を慕う少女たちには辛い現実を突きつけられる。

刻一刻と静かに音もなく近づいてくる審判の日。空から落ちてきた一機のIS。そのISはなんと、伝説のIS『白騎士』によく似た姿へと変形したのだった。

ホーエンが送るISの二次創作。コメディありシリアスありの作品

です。

プロローグ（前書き）

ここで掲載中のなのはs sが全く進まず、少し放置気味にしていたホーエンです。やっとこさモチベーションが復帰してきたのは、投稿します。誤字脱字、ご指摘などちよつと傷ついては、まっすぐ受け止めますので感想、よろしく願います。

プロローグ

—— お前に全てを託す。行け。そして——。

脳裏に響く誰かの声。誰の声だっただろうか。思い出せない。でもとても心がほっとすると同時に、何かが込み上げてきた。

そうだ。それがこの人の最期の言葉になったんだ。私を逃がす為にたった一人で立ち向かっていったんだ。

耳を劈く轟音。眼を焼く爆炎。揺れる生まれ育った場所。

そして視界が光で埋め尽くされる瞬間、私は見た。背中、胸を、腹を、肩を、腕を、足を切り裂かれ、撃ち抜かれたあの人の後ろ姿。

瀕死の状態。風前の灯の命。動ける筈なのに、あの人は剣を振るい、敵を倒して行く。

一度も退く事なく、一度も下がる事もせず、圧倒的な数で迫る敵に立ち向かっていく真っ赤に染まった背中。

手を伸ばし、あの人の名前を叫ぶ。

永遠の別れ。これで私は本当にひとりぼっち。嫌だ。もっと、もっと一緒にいたかった。一緒にいて、笑っていたかった。

声が聞こえる筈はないのに、あの人は振り返って、にっと子どもっぽい笑みを浮かべ、何かを口走った。

聞こえない。でも口の動きで分かった。それではっとし、私は同じように笑顔を浮かべる。

——うん。分かったよ。

そうだ。もう私たちだけの問題じゃないんだ。これはもっと大きな問題。

私もそれを承知で志願したんだ。反対も何もかも押し切って、最期まで貫き通すって決めたんだ。

なら行かないと。

光に染まっていた視界が闇に消える。無事にあの場所に行けるか分からない。とても確率が引くような博打だとあいつが言っていた気もするけど関係ない。

さあ。行こう。あの人に会いに。そして——。

世界で唯一ISを扱える男子、織斑一夏と一夏のセカンド幼馴染みにして、中国の代表候補生の鳳 鈴音の因縁のクラス代表戦の最中、轟音が対決を停めた。試合会場である国立IS学園の第二アリーナの中心、絶対と言うべき防御力を持つアリーナのフィールドを突き破り、土煙と共に現れたのは、見たこともない全身装甲の異形のISだった。

IS。正式名称は『インフィニット・ストラトス』。

世に出た直後こそ注目を浴びなかったが、『白騎士事件』と呼ばれる事件後、宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーッにしてはあまりにも破格すぎる性能により、瞬く間に広がり、今では各国の軍事力ⅡISの数となった。

異形のISが周囲を確認するようにセンサーを奔らせる。その姿を見て、一夏は疑問に思った。

あれは本当にISなのかと。

通常、ISは部分的な装甲しか持たない。理由として防御のすべてを不可視の障壁であるシールドエネルギーで行うため、物理的な装甲はあまり意味を持たない。無論、防御型のISは物理的なシールドを多く搭載しているが、それでも全身すべてが装甲に包まれたISなど不自然だ。加えて、その形状もおかしかった。以上に長い腕は全高二メートルはあろうかと思われるのだが、地面についている。加えて不規則に並んだセンサーレンズと全身にくまなく装備された姿勢制御用のスラスタ。ISと言うより、人型兵器と言う印象が強かった。

一夏が問いかける。お前は誰なのだと。返ってきたのは沈黙。アレが何なのか、一体、何の目的でここに現れたのか分からない。だが、いきなり攻撃してきた事から友好的な目的ではない。管制室で試合を監督していた山田マヤ教師が二人に撤退の指示を伝えるが、一夏は拒否。敵は観客席を守る為のフィールドをたやすく突破した上、放たれたレーザーはかなりの高出力。観客席に被害が及ぶかも

しれない。その判断の元、一夏は教師のISが到着するまでの時間稼ぎをすることにした。一夏と鈴音は即興のコンビネーションで異形のISに突撃した。

戦闘を開始して約十分。またもや一夏がある事に気付く。異形のISは確かに強敵だったが、どこか機械的な動きしかないことに一夏はあれは無人機ではないかと思うが、直ぐそばで戦っていた鈴音はそれを否定する。

それはISの基本原則の一つ。ISは人が乗らなければ動かないのだ。だが一夏は反論する。言い返したいが時間がない。鈴音はとりあえずはあれを無人機として認識し、どうやってあれを停止させるか一夏に尋ねる。

一夏はどこか自信ありげにあると答える。策はあった。それも二段構えの。

鈴にたいした説明もなく一夏は行動に移す。

作戦はこうだ。一夏のIS《白式》には対象のエネルギー全てを消滅させる、全IS中最強の攻撃力を誇るワンオフアビリティ「零落白夜」がある。シールドエネルギーすらも攻撃に回すその一撃は直撃さえすれば、どんな強固なISでも一撃で倒せるまさに必殺技。

だが当たらなければどんな攻撃力もゼロに同じ。そこで一夏は直撃させるために、何度も練習した基本動作『瞬時加速』、鈴音のIS《甲龍》の第三世代型兵器『衝撃砲』のエネルギーをも取りこみ、『超瞬時加速』による超高速接近で倒そうとした。

結果は右腕を切り落とし、一夏は反撃を喰らう。だが、それでもいい。元よりこの策は二段構えである。一夏を吹き飛ばそうと異形のISのレーザー砲が輝きを増す。だがレーザーが一夏を焼き尽くす事はなく、逆にレーザーで焼き尽くされた。観客席に待機していたイギリスの代表候補生セシリア・ウォルコットのISフル・ティアーズによる狙撃が直撃したのだ。

そう。一夏の二つ目の策。一撃目で敵を撃破出来なければ、観客席を守るフィールドを「零落白夜」で壊し、セシリアの狙撃で倒そうと考えていたのだ。

異形のISは大地へと落ち、沈黙する。

戦いは終わった。引き締まっていた空気が弛緩し始めた直後、一夏のハイパーセンサーが警告を発する。

上空より超高速で接近する熱源あり。

上を見上げた直後、異形のISと同じくフィールドを突き破った謎の物体が、異形のIS近くに落下し、轟音とともに土煙を上げた。

「こ、今度は何だ!？」

一夏が『白式』の唯一の武器である実体剣「雪片二型」を青眼に構え直した。何が起ころうとも対処できるようにじっと土煙を見つめる。

土煙が晴れていく。異形のISの傍。誰かが倒れている。

「えっ……IS？」

最初に落ちてきた異形のISとは対照的に、こっちは一目見ただけでISと判断できた。白を基調とし、アクセントとして赤を入れた簡素だが強固な作りの装甲。背中には推進装置と思える一対の大型の翼。そして膝まで届く、日本人特有の漆黒の艶やかな髪と白い肌。間違いない。落ちてきたのはISを装備した女性——いや、自分と同じぐらいの少女だ。

「うそっ……どこのISよ？」

いつの間にか傍に来ていた鈴音がびっくりした声を上げる。

その声に反応したのか、謎のISを纏った少女がゆっくりと体を起こし始める。

「おい。大丈夫——まずい!？」

一夏が気づく。異形のISがセンサーレンズが点滅し、仰向けに倒れたまま直ぐ傍にいた少女に向け、左手のレーザーを向けていた。

「逃げろ早く!」

一夏が駆けだすが到底間に合わない。光が充填する。少女がゆっくりとした動作でレーザー砲に視線を向ける。まだ意識がはつきりしていない。おぼろげな感じだ。

レーザー砲が放たれる。間に合わなかった。

一夏の心が絶望に染まった。助けられなかった。

だが次の瞬間、一夏はあり得ない光景を見た。

レーザーは確かに放たれた。だが、レーザーは何故か少女に当たる直前、何かに弾かれるように四方に四散したのだ。

「えっ……？」

驚きの声を上げるが再び目を見開いた。

少女の体が弾かれた様に立ち上がる。同時に纏っていたISの装甲が光り輝きだし、凄まじい勢いで少女の体を這い、増殖するように装甲を装着していた。通常のISのように両手足、そして体と頭の一部に纏っていた筈が僅か一秒の間に全く別のISへと変化した。

——いや、違う。変化したのではない。変形したのだ。

一夏は言葉を失う。その姿には見覚えがある。たった一度だけ姉であり最強のIS操縦者である織斑千冬のパソコンで見た覚えもない、そして世界でもっとも有名なIS。

「白……騎士——？」

茫然と呟く。

そう。そこには所々デザインこそ違うが、間違いなく世界で最初のIS、『白騎士』が立っていた。

第一話（前書き）

しばらく戦闘シーンが続きます。

第一話

「う……………」

織斑一夏が意識を取り戻した瞬間、最初に感じたのは全身から発せられる痛みと窓から入る夕焼けに照らされた、鼻先三センチまで近づいていたセカンド幼馴染、凰 鈴音の顔だった。

「……鈴。何してんの、お前？」

「おっ、お、おっ、起きてたの?!」

鈴音は慌てて一夏から離れる。顔はこれでもかと言つぐらい真っ赤で、どこかほっとした様な残念そうな表情を浮かべている。

何でそんな顔を浮かべているんだ。と思いつつ、一夏は顔をしかめながら体を起こした。

「ちよっ、寝てたほうがいいわよ一夏」

「いや、大丈夫だ。それよりも何でオレこんなところには……っ! ? そうだ。鈴、あの子はどうなった! ? いや、それ以前にお前にセシリアは大丈夫なのかよ! ?」

体を動かすなと訴える痛みを無視して、鈴音の肩を掴み、尋ねる一夏。突然、肩を掴まれ、顔を近づけられた鈴音は別の意味で顔を真っ赤にした。

「い、いい、一夏近い近い!!!」

「あつ、わりい……」

「も、もう。いっぺんに説明しないでよ。今、説明してあげるから」

鈴音は僅かに乱れた衣服を整えると同時に、深呼吸して一気に急上昇した心臓を落ち付けるように深呼吸すると、どこか神妙な表情で一夏を見据えた。

「まず私は無事よ。セシリアもね。ISはちよつと破損しちゃったけど修復できるレベルだったわ。アンタの『白式』も同じよ。それであの白いISはアンタを掴まえた直後に機能を停止して、別室で嚴重に保護されているみたい」

「そうか……」

とりあえず怪我はなくて何より。一夏はほつと胸を撫で下ろした直後、神妙な顔つきで視線を下に向け、己に問いかけた。

脳裏に浮かぶのは、伝説のISと呼ばれる『白騎士』に似たIS。ぞくつと背筋に寒気が奔った。

今、思いだしてもあのISは寒気がする。いや、あれをISと言うカテゴリーに入れているものか。

一夏はゆつくりと記憶を思い出し始めた。

「白……騎士——？」

一夏は茫然と呟く。見据える先には、確かに一度だけ映像で見た白騎士が悠然と佇んでいたのだ。

白騎士と言う名の通り、それは機械で構成された中世の騎士だった。背中には主推進装置と思われる『白式』に似た巨大な一對の翼状のスラスタ―。両肩には非固定浮遊部位のライトシールド状の補助推進装置兼防御装甲。頭部は完全に装甲に覆われて顔を見ることは出来ない。頭頂部の辺りには鶏冠のような形状になっていて、スリット式のセンサーバイザーがある。機能性を重視しているのか、シャープな造りに見えるにも関わらず力強さを感じずにいられない。幾千にも走る装甲の繋ぎ目が装飾のように見え、本当に白騎士の名にふさわしい姿だった。

誰もが息をのみ、誰もがその存在に注視した。

一瞬の沈黙。誰もが言葉を失う。

その刹那、僅かな異音と共にあの異形のISが体を起こし、残った左腕を振り上げ、白騎士に似たISを吹き飛ばそうと振り払った。

「あぶ————なあっ?!」

一夏が目を見開く。そこにはまたもや信じられな光景が広がっていた。白騎士に似たISは正面から高速で振るわれた鋼鉄の腕を、まるでそよ風を遮るように突き出した左手で受け止めたのだ。いや、受け止めたと言う表現は些かおかしいかもしれない。何故なら鋼鉄の腕は広げた手に接触することなく、約一〇センチの隙間を置いて停止していたのだ。そう、まるで自分から止めたように見えた。

だが、それもすぐに違うのだと一夏は察する。鋼鉄の腕が痙攣している。まるで見えない力を断ち切るように動かしているように見えた。事実、鋼鉄の腕は捉えられていた。見えない鎖に。その鎖を断ち切ろうとするが、腕は異音を発し、限界を告げる。

白騎士に似たISは僅かに俯いていた顔を上げ、ゆっくりとした動作で異形のISの腕を掴んだ瞬間、その腕のどこにそんな出力があるのか、自分よりも一回りも二回りも巨大な異形のISを物凄い勢いで自分を視点に巨体を一回転させ、地面に叩き付けた。

叩きつけられた異形のISの胴体は地面に大きくめり込む。絶叫か、耳障りな金切り音と至る所から火花を飛ばす。

だが、それだけでは終わらない。白騎士に似たISは左足を上げ、憎しみが籠っているように異形のISの胸を踏みつける。ガンと胸部装甲が大きくひしゃげる。そしてさらには掴んでいた鋼鉄の腕を力任せにもぎ取った。

迸る大量のオイルと飛び散る無数の細かなパーツ。びくびくつと痙攣する異形のIS。観客席から悲鳴が上がった。もし操縦者がいるならそれは操縦者の腕をもぎ取ったのと同じだったからだ。

「な、何よ……あれ？」

鈴音が顔を青くして呟いた。一夏も同じだ。やりすぎだと言うレベルじゃない。あの白騎士に似たISは間違いなく、異形のISを殺そうとしている。

白騎士に似たISが左手に持っていた鋼鉄の腕を無造作に放り投げる。ごろごろと転がる腕。踏みつけていた左足を下ろすと、右手で異形のISを掴む——いや、突き刺し、無理やり胸ぐら辺りに持ち手を作るとゆっくりと持ち上げ、左手を空手で言う抜き手のようにして腕を後ろに下げた。

「まさか……」

放送室にいた篠ノ之箒が戦慄したように呟く。まさに彼女の想像通りに事態は運ぶ。

ドカツ。と言う音が響き、観客席から悲鳴が上がった。機能を停止した異形のISの腹部を容赦なく白騎士に似たISの抜き手が貫いたのだ。

最期の痙攣を行う異形のIS。だが一夏はこれで終わらないと言う事を本能的に察した。あの白騎士に似たISから発せられる威圧的な気が、それとも狂気が、体が言う事を聞かず、見ている事しか出来ないが、あの白騎士に似たISは更なる狂気と殺戮を行おうとしているのを感じた。

メキメキと無理やり鉄を引き裂く音が響く。そう。白騎士に似たISは最期の止めを刺そうとしていた。腹部を貫いた時点で異形のISはその機能を停止しているが、それはあくまでも一般論。このIS、この搭乗者にしてはそれは止めとは言わない。

——そして後のIS学園で語り継がれる恐怖の現実が具現化する。

引き裂かれた。目障りな音を奏でて。異形のISは胸と腹部の間、ちょうど鳩尾のあたりを引き裂かれ、その傷口から内包していたありとあらゆるモノを大気に撒き散らした。

降り注ぐオイル。それが白騎士に似たISの装甲を伝う。その姿は返り血を浴びた殺人騎。このISが封じる狂気と殺戮を象徴するようだった。

上半身を右手に、下半身を左手に持っていた白騎士に似たISはその存在すら目ざわりなのか、ぶんつと手を広げる様に異形のISを放り投げ、壁に叩き付けた。

静寂。誰もが恐怖に縛られ、口を閉じ、静止する。

（——何だよ……お前……）

異常。理解不能。

そうとしか言いようがない。一夏にしてはISの戦いはあくまでもスポーツだ。だが、このISは違う。間違いなく敵は殺し、壊し、破壊する。

空気が重い。まるでコルタルの様に粘り気がある。白騎士に似たISの視界に自分達が入っていないと言うのに、喉元に無数の剣を突き付けられているように感じる。

ふと、白騎士に似たISが顔を上げた。その視線の先——そこには放送室。そしてそこにいるのは確か——。

一夏が戦慄する。まさか、このISはまだ他に手をかけようとしているのか。あの異形のISのようにその視線の先にいる敵を引き裂こうとしているのか。

駄目だ。絶対に駄目だ。

足に力を込め、「雪片式型」を強く握り締める。だが力が入らない。震えている。今まで経験したことないぐらいに両手足が、唇が震える。

恐怖が完全に心を支配している。心のどこか、冷静なもう一人の自分が言っている。

——あれは今の自分では到底太刀打ちできない敵であると。飛び交う羽虫の様に大した抵抗もなく殺されると。

逃げだしてしまいたい。だが逃げるなんて選択肢は消し飛ばす。教師の応援が来る気配はない。隣にいる鈴音も観客席にるセシリアも恐怖に支配されている。

今、ここでアイツを食い止められるのは自分——織斑一夏だけだ。

「っ……！」

歯を強く噛締める。恐れるな震えるな。止まれ。頼む止まってくれ。今、ここでオレが動かないと、筈が——。

白騎士に似たISが僅かに腰を落とす。背中の翼を広げる。飛ぶつもりだ。

ぎりつと歯をさらに噛締める。同時に口から鋭い痛み。唇を噛みきったようだ。だがその痛みで一夏を縛っていた恐怖が僅かに緩和された。

「——うおおおおおおお！！！！！」

恐怖を追い出すように、己を高めるように咆哮する一夏が『瞬時加速』を行い、真つすぐ突撃した。

「一夏！？」

「一夏さん！？」

鈴音、セシリアが驚愕する。

シールドエネルギーは一〇〇を切っている。こんな状態で戦うのは愚の骨頂だと分かっている。だが、それでも、あの白騎士に似たISを止めなくては。

一夏が「雪片式型」を両手に構え振り上げる。直線的でカウンタ―をあつさりと当てられそうな動き。虚実を混ぜた攻撃をすべきなのに、一夏には攻撃をする余裕がない。今はただ、敵の注意をこちらに向けなければ。

「だあああああ！！！」

渾身の力を込めて振り下ろした。だが、その一閃はいともたやすく、白騎士に似たISは防御した。右手の指三本。人差し指と中指、そして親指で挟みこみ、止めたのだ。それも一夏のほうを見ず、まるでその剣の軌道を熟知しているように、意図も容易く受け止めたのだ。

「くっ……！？」

押し切ろうと、振り払おうとしたがびくとも動かない。そんな中でも白騎士に似たISはそんな一夏のほうを一切見ず、じっと箒を見つめている。

「お前……こっちを見やがれ！」

声を荒げ、怯えている自分を隠すように叫ぶ。だが、それでも白騎士に似たISは振り向かない。ただじっと箒を見つめている。それが一夏には、箒をどう料理して殺そうかと思案しているように見えた。

「くっそお——」「一夏さん。離脱してください！」——
「！」

セシリアの鋭い声。一夏は唯一の武器である「雪片式型」から手放し、急速離脱する。それと交差するように幾条のレーザーが通り過ぎた。着弾するレーザー。どうやら狙撃と言うより弾幕を展開して、一夏の離脱を手助けしたようだ。土煙が舞い上がり、白騎士に似たISの姿が消える。

「一夏。使いなさい！」

直ぐ傍に接近した鈴音のIS『甲龍』に装備されている二振りの近接実体剣「双天牙月」の一本を一夏に投げ渡した。

「鈴、セシリア!」

「双天牙月」を受け取り、二人の助けに思わず破頑する一夏。

「アンタ、馬鹿じゃないの!? 死にたいの!?」

「一夏さん。今回の事はさすがの私もひやひやしましたわ! 無鉄砲すぎます!!!」

二人とも、声を荒げ、顔を怒りに染めて一夏に怒鳴り付けた。

「た、助けに来てくれたと思っただ途端に怒鳴られた……」

「まったく、ほんとアンタ馬鹿! 馬鹿だ馬鹿だと思ってたけどここまで馬鹿だとは思わなかったわ!」

「一夏さん。あの直線的な動きは何ですか!? あんな動きでは殺してくださいと言っている様なものです! わたくしとの訓練の時以上に酷かったですわ!」

「わ、悪い……お、お叱りは後でしっかり受けるから……今はアイツを何とかしよう。な?」

「——後で時間空けときなさいよ?」

「——一夏さん。この件は腰を据えて、じっくり話しましょう」

どこか暗い瞳で告げる二人に、壊れたおもちゃの様に頷く一夏。不思議と先程まで縛っていた恐怖が消えていた。

対して鈴音とセシリアも同じだった。一夏の力強い荒々しい咆哮。その声を聞いた瞬間、不思議と恐怖が和らぎ、援護出来たのだった。

（まったく……本当鈍感で馬鹿なんだから！ いきなり突撃して行って死んだと思っただじゃない……。でも——）

（まったく、理解に苦しみますわ！ まさかここまでお馬鹿さんだとは思いませんでしたわ一夏さん……。でも——）

二人してちらりと一夏を見て、同時に微笑むようにして呟く。

（でも……一夏^{さん}らしいよね（ですわね））

土煙が晴れていく。「雪片式型」の刃を持ったままの白騎士に似たISはこちらに視線を向けていた。

「どうやら……ようやくお眼鏡にかなったようですね……」

「そうみたい。どうする。逃げるなら今のうちじゃない？ イギリスの代表候補生？」

「冗談はやめてくださいまし。一夏さん。作戦はありますか？」

不敵に笑みを浮かべる鈴音とセシリア。もう恐怖はない。だって傍には守りたい、そして守ってもらいたい人がいる。

「ねえよ。ただ倒せるとしたら、アイツが握っている「雪片式型」しかない。シールドエネルギーも残り少ないから、出来る限り早く取り返して倒す」

「と言う事はアタシとセシリアがオフエンス、一夏がサポートね」

「ああ。それしかない。……鈴、セシリア」

一夏は二人の瞳を見据える様に視線を送る。

どきりつと二人の鼓動が早まった。強い瞳。女を魅了する男の意志の光に当てられた。

「アイツを止める。力を貸してくれ」

「ふ、ふん。いいわよ。利子付きで返してもらっから！」

「言うに及びませんわ！」

「じゃあいくぜ！」

鈴音を先頭に一夏も飛び出す。セシリアは六七口径特殊レーザーライフル「スターライトMk？」を構えた。

一夏が目覚めたと同じ時刻。IS学園の地下施設の一角。レベル

4以上の権限を持つ者しか入れない区画に急ぎよ、第二アリーナと同じ出力防御フィールドを張り巡らした部屋が設置された。その部屋の中央には医療器機に繋がれたベッドで眠る一人の少女。それを強化ガラス越しに見据えるのは、IS学園の教師織斑千冬と副担任の山田マヤだった。

「山田先生。結果はどうでしたか？」

千冬は少女を見据えたまま、背後に立つマヤに尋ねた。

「全て……アンノウンです。こちらのコードを全て受け付けません。信じられない事ですが、委員会が定めた緊急解除コードもエラーが出てしまいます」

「……つまり正体不明のISと言う事が……」

「はい……でもこんな事はありません。それにあの子の持つているISの待機状態……あんなの見た事ありません。いえ、それ以前に、そこまでする必要性があるのでしょうか？」

「あるからこそしてるのだらう。もう一機のほうは？」

「やはり無人機でした。加えて委員会に登録されていないコアが使用されています。あの子のコアは未確認ですが……おそらく登録されていないコアだと思います。織斑先生、上と委員会は何と？」

「上はとりあえず現状維持。委員会は会議中だ」

「そうですか……」

マヤが視線を少女に向ける。

「……あの無人機もそうですが、あの子とあのISはもっと異常です。防御力、機動性、機体出力……誰の目から見ても分かります。あのISは存在する筈がありません……」

「だが存在している。まさに矛盾……か」

「織斑先生。一体、何が起きているのでしょうか？」

「分かん。無人機のほうは少ばかり心当たりがあるが、こっちはさっぱりだ」

そう言つて、直ぐ傍に白騎士に似たISと一夏達の戦闘映像を起動させ、見つめる。

世界最高位の座にいた操縦者はこの映像を見て、心の中で一つ呟く。

（完成された白騎士——か）

第二話（前書き）

これedyouやく戦闘シーンが終了です。

次話でいよいよ、あの全国一千万をISSファンを魅了したあのシャ
……が登場します。

第二話

伝説のIS『白騎士』に似たIS。一夏はとりあえずそれを『白騎士』と呼ぶ事にした。

『白騎士』と戦闘を開始して数分。敵は回避のみに集中していた。一夏が敵を注意を引き付け、鈴音が斬り込み、セシリアが援護する。即興のコンビネーションだったが、素人から毛が生えた程度である一夏でも、それは十分な連携だと思った。

普通のIS操縦者なら間違いなく追い詰められている。追い詰められなくても手傷を負わせられる筈だ。だが『白騎士』は違った。海の中を漂う海草のようにゆったりとしつつも滑らかな機動で攻撃を回避する。

セシリアのIS『ブルー・ティアーズ』のオールレンジ攻撃、ビットである「ブルー・ティアーズ」の位置も発射のタイミングも知っているようにかわし、どんなに巧妙に一夏と鈴音が接近して攻撃しても、するりと幽鬼の様な動きでかわす。

触れられそうに触れない。手で掬い上げた水のように、すり抜けていく。

（追い詰められてる………！）

一夏は生唾を飲み込んだ。

一方的に自分達が攻撃しているのに、攻撃を仕掛けてきていないのに、ダメージが蓄積していくのは一夏達のほうだった。肉体的に、

IS的にじゃない。心理的にだ。

「くそっ……何なのよあいつ!？」

見かけは熱くなりそうだが、戦いでは冷静な鈴音ですら、酷く焦った声を上げた。

当たらない。どんなにフェイントを仕込んだ攻撃をしても、複雑な機動を描き接近しても届かない。まるで蜃気楼のようだ。

「何もかも読まれている……そんな馬鹿な事あるわけありませんわ?!」

後方で今も尚、六七口径特殊レーザーライフル「スターライト Mk?」を構えているセシリアがどこか怯えた表情で叫んだ。

セシリアのイメージの中では、何度も何度も確実にレーザーが『白騎士』を貫いていた。敵の進行方向、予測回避機動、確実に命中出来る発射のタイミング……何もかもが完璧で、当てられる筈だった。だが当たらない。何故かどうしても完璧なイメージが現実でずれてくる。その事実にはセシリアは恐怖していた。

(やばい……こいつは……)

格が違う。いや、それ以前の問題。比べるという事こそ愚か。目の前の敵は、今の織斑一夏では手を伸ばす事はおろか、見る事も出来ないはるか異界に輝く星と同じだ。

と、その時。上空を漂っていた『白騎士』が、ゆっくりと一つ一つの動作を確認するように起き上がり、改めて三人を見据えた。

「——あつ……」

蒼き天空を背にこちらを見下ろす騎士。まるで天上から遣わされた審判者のようだ。

（見られているだけなのに——）

息が詰まる。空気が重く、嫌な汗が噴き出る。見えない鎖に全身を雁字搦めにされたようだった。

白騎士が右手に持っていた「雪片式型」を軽く上に投げ、柄を握った。

その瞬間、威圧が倍増し、一夏が叫んだ。

「鈴、狙われているぞ!!」

「えっ……?」

この時、鈴音は一度たりとも『白騎士』から眼を離していない。一夏から突然声を掛けられても、圧倒的な力を持つ敵から注意を逸らすなんて愚かな行動はしていない。

なのに——いつの間にか目の前に『白騎士』がいた。

まるで目の前の空間から一瞬で出現したように現れた。

「はっ……?」

間抜けな声を漏らす。あまりの突然の出来事に鈴音の理解が追いつかない。

ここで初めて、ハイパーセンサー越しではなく、鈴音の肉眼で『白騎士』の顔を確認した。

近未来的でありながら中世の意匠を組み込んだ顔。無機質なスリットバイザーからは何も伝わってこない。だが、全身からは嫌と言うほど伝わってくるモノがある。

——お前を倒す——。

振り上げられる「雪片式型」。まずい。鈴音はほぼ条件反射的に「双天牙月」を盾代わりにして、さらに両肩の棘付き装甲も防御へと回す。

間にあつたのは本当に運だったが、振り下ろされた一撃は文字通り化け物染みていた。「双天牙月」は刀身の中ほどから砕かれ、さらに両肩の棘付き装甲も粉碎されたが、それでも威力は殺がれない。鈴音は凄まじい速度で叩き落され、地面へと激突。『白騎士』が現れた時以上の土煙とクレーターを作り上げた。

「鈴!?!」

「そんな……今のは『瞬時加速』?! なら何て桁違いの出力なんですか?!」

後方に位置していたセシリアには、突然鈴音の前に現れたからくりが分かった。

単純な話だ。『白騎士』は一夏が習得した『瞬時加速』を行っただけなのだ。『瞬時加速』はスラスタからエネルギーを放出、それを内部に取り込み、再度圧縮して放出する。その際に発生する慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する仕組みだが、『白騎士』はこの放出されたエネルギーと圧縮放出率が桁違いに高い為、『爆発的』ではなく、ほぼ『瞬間的』に移動できるのだ。

「ありえませんか……。こんなISありませんわ!？」

反響した様な声でセシリアが叫ぶ。『白騎士』がゆるりとセシリアを見る。

「セシ———!」

一夏の警告の声は、セシリアが第二アリーナの壁に叩きつけられた時の轟音で消された。そして鈴音の時と同じように、一夏の目の前に『白騎士』がいた。『瞬間的』な『瞬時加速』を行い、セシリアを蹴り飛ばし、同時にセシリアを土台にして、一夏の前に移動したのだ。『瞬時加速』の瞬間加速性能は元より、その加速を一気に制止させる瞬間原則性能も圧倒的だった。

「あつ———がはっ!？」

伸びた左腕が一夏の首を掴み、そのまま高速で落下。地上へと叩き付けた。

「がはっ、はっ………うつ、あ………」

肺にあった空気が強制的に吐き出され、視界が揺らぐ。頭を打ったようだ。

うつすらと見上げる先には、土煙の中、「雪片式型」を逆手に持ち、突き刺そうとしている『白騎士』の姿があった。

（やばっ……死、ぬ……）

逃げなければ。だが体が言う事を聞かない。それに意識がはつきりしないためか、死の恐怖が感じられなかった。

唯一の武器、相棒たる「雪片式型」の刃先が鈍く光り——振り下ろされた。

刺さったと一夏は確信したが、痛みはなかった。不自然に思い見ると、胸部装甲一センチ手前で「雪片式型」は停止していた。良く見れば刃先が揺れていた。

「——やめ、なさい……ナイツオブラ、ウン……」

小さな小さな呟き。だが確かに気を失う寸前の一夏の耳に届いた。

その声に反応して、『白騎士』がビデオの巻き戻しの様に増殖していた装甲が一気に消えていき、スライドしていた部分が閉まっ
ていく。そして僅か一秒弱で最初に現れたISの形状へと変形して、
ようやく搭乗者の顔を確認出来た。

艶やかな黒髪の下。うつすらと開かれた眼は、弱弱しいながらも
消える事のない輝きがある。整った顔立ちだ。

「綺麗……だ」

その声に反応したのか、少女が一夏を視界に捉えるところか懐かしそうな頬笑みを浮かべ、胸に倒れた。

それで終わり。一夏もまた気を失い。戦いはようやく終結した。数多の謎を残して。

——気が付くと、私は瓦礫の世界にいた。

大地にはありとあらゆるモノが散らばっている。完璧なモノはどこにもなく、全てがどこかしら破壊され、無残にも散らばっている。

良く見れば都市の残骸の他に、破壊されたISの残骸もあった。一つ二つじゃない。少なくとも見える範囲ではあるが、百は下らないだろう。搭乗者の姿はないが、大地に突き刺さっている武器が墓標のように見えた。

——やめて……。

眼を閉じ、この世界から眼を背けた。

見たくない。見せて欲しくない。どうしてあの子はこの世界を見せるのだろうか。あの子はそうまでして、私にこの悲惨な世界を見

せつけるのだろうか。

忘れるなって事なの？ 忘れてない。忘れられる筈はない。これは私に明確に刻みつけられている。

だから——もうやめて。お願いだから。

私はその場でうずくまる。静寂の瓦礫の世界。何も聞こえない事が恐ろしくて、両手で耳を塞いだ。

早く、早く戻れ。この世界から出して……——！！

どれほどそうしていただろか。一秒が一分に、一分が一時間に感じていた時、不意に人の気配がした。

恐る恐る眼を開ける。ISの脚が見える。

顔を上げる。そこには——あの人がいた。

「——意識レベル正常。完全に覚醒しています」

少女が目を開けると、見慣れない天井とこちらをどこか恐ろしげに見る白衣を着た女性だった。どうやら医者のだ。少女は何気なく医者の方を見ると、びくつと体を震わせ、表情こそこちらを安心

させる様な顔を浮かべているが、眼には明確な恐怖が見えた。

「こっ、は……」

体を起こそうとしたが、動かなかった。不自然に思い、首を少し動かして両手を見ると現住に拘束されていた。

「眼が覚めたか？」

強い気質を秘めた声。少女はそちらに視線を向けると黒髪に黒のスーツを纏った女性が腕を組み、こちらを見下ろしていた。その背後にはISが二機、ライフルを持って武装待機していた。

（打鉄とリヴァイブ……）

「さっそくで悪いが、名前を教えてもらおうか？」

「名前……」

「そうだ。お前の名前だ。そしてお前はどこの国籍だ？」

「名前……」

何だっただろうか。私の名前……あの人から送られた大切な私を存在を証明するモノ……。

しばらくの沈黙。

「——ナツ……キ」

少女は何かを思い出したように、小さく呟いた。

「なつき……それがお前の名前か？ 苗字は？」

「苗字……分からない……思い……出せない……」

黒髪の女性は鋭い目つきで少女を威嚇する。嘘を付くなよと警告しているようだったが、事実だったので少女はその視線を真つ正面から受け止めた。怯えはない。むしろ、こんな風に初対面の相手から威嚇される覚えはないので、不愉快だった。

黒髪の女性はどこか自分の苛立ちを吐きだすように溜息を吐くと、次の質問する。

「じゃあ、お前のＩＳの名前は何だ。どこで開発された？ 何故試合中に乱入し、生徒達に危害を加えた？」

「——質問ばかりね。こっちからも質問させてくれませんか？」

意識が完全に体を掌握した。両手足を僅かに動かし、反応を確かめながら言葉を返す

「お前に質問する権限が与えられていない。こちらの質問にだけ答えてもらおう」

「気の強い人……貴方、彼氏いないでしょう？」

「……状況が分かっていないようだな。お前のした事は刑務所、ひいては極刑もあり得る重罪を犯したんだぞ」

「それは怖い……。こんな薄幸そうな私が、そんな重罪を犯したなんて信じられないわ……。ところで名前を覚えてくれませんか？ 例え尋問でもコミュニケーションは必要でしょう？ それに私は自分の名前を名乗った。貴方も名乗るのが礼儀ではないでしょうか？」

「……織斑千冬だ」

「おりむら……ちふゆ……」

確かめるように呟く少女。それはその名前を記憶のライブラリーから検索しているようだった。

「聞いた事のある名前……。ああ。『ヴァルキリー』ね。お会いできて光栄です」

「さて、話を戻すぞ。まず――」

そうして千冬はまず彼女の事を尋問した。出身地から家族構成から始まり、質問するがなつきは自分の名前以外、全て分からない、思い出せないと答えた。これが嘘なら少々、荒い手段を用いて喋らせるが、どうにも嘘を言っているように見えなかったのだ。おそらく事実なのだろう。典型的な記憶喪失だ。

「もういい。なら質問を変えよう。その右手は一体何だ？」

千冬の眼がなつきの右手を捉える。正確には手の甲の部分。丸い透明な宝玉を中心に機械的なパーツが囲んでいる。それが手の甲に埋め込まれているのだ。

「これ……私のISです」

「ISに関してははっきりと覚えているようだな。名前は？」

「『ナイツ・オブ・ラウンド』」

「円卓の騎士、か……。なるほど、『白騎士』の姿をしたISのもう一つの名前としては十分合っている。それで何故、戦闘行為に及んだ？」

「『白騎士』……？ 戦闘？ ……ああ。そうか。そういうことか……」

なつきは納得したように一度頷くと、天井を見上げる。

「どうやらこの子が私を守る為に戦ったみたいですね。すみません」

「この子？ それはISの事か？ お前が戦っていた訳ではないのか？」

千冬は僅かに困惑した。それはあり得ない。あの動きは間違いなく人間にしか出来ない動きだ。一と〇、理論と法則が支配する自動制御では決して到達できない人間のみが到達できる極限の機動。

「記憶がありません。でも、この子——『ナイツ・オブ・ラウンド』には私を守る機能があると、あの人が言っていました」

千冬の眼が僅かに鋭くなった。あの人とはまさか、あいつなのかと心の中で呟く。

「あの人は……誰だ？」

「……分かりません。ただとても大切な、とても優しい人。私を命がけで守ってくれた……もう会う事も出来ない遠い場所に行ってしまった」

つうと、なつきの瞳から涙がこぼれた。

顔は靄が掛った様に思いだせない。ただ、その人の温もりだけは記憶を失っても、心に強く刻まれている。

「……分かった。もういい。また来る」

千冬はそう言って、二機の護衛ISを連れ立って部屋を出て行った。残されたなつきはしばらく天井を見上げていたが、最期に小さく呟いた。

「記憶……せめて……あの人の顔だけは覚えていたかった……」

「どうでしたか？ 織斑先生？」

なつきが収容されている隣室。そこに山田麻耶が椅子に座って、

医療機器並び部屋を囲っている防御フィールドの制御装置を監視していた。

「どうもこうもうないな。記憶喪失だそうだ」

「本当なんですか？」

「嘘を言っているように見えなかった。実際はどうか分からないが、検査待ちだな」

やれやれと言った感じで、椅子に座る千冬。そしてここ最近、何度も繰り返し見ている一夏達となつきとの戦闘映像を起動させた。

「……本当、何度見ても尋常じゃないスペックですね。彼女のIS。『ナイツ・オブ・ラウンド』でしたか？」

「ああ。この『瞬時加速』の時の瞬間放出量と吸収速度、圧縮率、現存するどのISの出力よりも数倍以上上だ。文字通り、本当に瞬間的に移動している」

「加えて機体の剛性、搭乗者の保護も恐ろしいほど高いレベルで実現されています。常識外ですね。……そういえば委員会やはり、引き渡しの要求を？」

「ああ。だが、それは不可能だ。なつきのISは骨は元より、神経にまで食い込んでいる。取り外すなら右手を切断するしかない。だが、その方法も取れないだろう。どうやらあのISは自律行動出来るらしい。搭乗者に危害を加える存在にはオートで発動するようだ。もし、我々や委員会の連中が無理やりISを取る様な事になれば……」

言わずとも分かるだろう。と、視線で伝える千冬。麻耶はぞくつと体を震わせた。

なつきの話が本当なら、間違いなくそれは彼女に危害を加える者達。現在、存在する各国最精鋭のISですら一糸も報いる事の出来なかった『ナイツ・オブ・ラウド』。それが牙をむけば、この広大なIS学園を灰塵に帰してもおかしくない。いや、それでもお釣りがくるだろう。

「では、どうするおつもりですか？ 封印処理をしようにもこちらのコードを受け付けませんし……かと言ってこのまま放置するわけには……」

ピツと言う電子音。ちょうど一夏達を見ろしている『白騎士』となった『ナイツ・オブ・ラウド』の姿が映っている場面だった。

「幸い、これは搭乗者であるなつきに危機が及んだ時に発動している。つまり彼女に危機が及ばぬ限り、発動する事はないと思うが……」

しかし、それは難しい話だった。

委員会はこの馬鹿げたスペックを有する『ナイツ・オブ・ラウド』を搭乗者ごと回収したがっているし、各国にも委員会を通じてこの機体の情報は流れている。東西を象徴する大国など表だって動きだそうとしている。

「ふむ……」

千冬は口元に手を当てて、考え込む。

大きな力は世界に大きな混乱を生む。ISが世界に出たように、この『ナイツ・オブ・ラウンド』も同じだろう。

それは千冬の望むところではない。いや、ただでさえ世界を混乱させている人物がいるのだ。これ以上の混乱を起こす訳にはいかない。

「……仕方ないか」

何かを思いついたように千冬は呟いた。

第三話（前書き）

ついにシャル登場。銀髪眼帯娘ファンの方もしばしお待ちください。
シャルに関しては、私ホーエン独自の解釈で書かせていただきます。
あんないい子をないがしろにするクソ親父には必ず鉄拳制裁してや
ろうと思ってます（笑）

ゴールデンウィーク連続更新は終了。三日か、二日間隔で更新を目
的に続けていこうと思っています。

では、三話目どうぞ！

……………そろそろ感想が欲しいな……………なんて。

第三話

シャルロット・デュノアは実の父親の命令で、性別を偽り、シャルル・デュノアとしてIS学園に入学した。父親の命令とは二つ。一つは父親が経営するデュノア社の広告塔。もう一つが世界で唯一ISを扱える男、織斑一夏とその専用機『白式』の調査、いやデータを盗んでこいと言う命令だった。

本当は拒否したい気持だったが、その気持ちを明確に表す事が出来ず、こうしてIS学園にやってきた。

何故だろうと自問する。二年前に母親が無くなった時、父親は葬儀には来なかった。薄情な人だと思ったが、シャルロットにしてみれば、それは父親と言う名の他人だ。会った事がなかったのだから葬儀が一段落して、これからどうして生きていこうかと考え始めている時に、父親の部下がやってきた。会った事もない父親が、シャルロットを引き取ると言う事で迎えを寄こしたのだ。

その時、ほんの少し嬉しかった事を覚えている。でも、父親と顔を合わせた時にそれはあっさりと消えた。父親はシャルロットの方を碌に見ず、「私の為に働け」と命令して親子の再会は終わった。

そう。シャルロットの父親は何らかの方法で、シャルロットに所属しているテストパイロット達以上の高いIS適性がある事を知り、何とか利用出来ないかと考え呼び寄せたのだ。つまり娘としてではなく、利用価値がある道具として呼んだのだ。

言い様のない悲しみが心を染めた。さらに追い詰めるように、父

親の家で本妻と顔を合わせ、頬を叩かれ、「泥棒猫の娘が！」と罵られた。

ヒビだらけの心が崩れる。でもそれを必死にかき集めて、かろうじて留めた。出ていく事は出来る。だがそこからどうするのか。ここにいれば、生活は出来る。生きていける。心さえ封印してしまえば。

デユノア社の非公式テストパイロットになり、父親の命令には忠実に従った。糸の繋がった人形のように、反論することなく辛いテストをこなしてきた。

ああ。そうか、と転入する一年一組の副担任山田真耶の後を歩きながら、納得した。

逆らえないじゃないか。だって私は操り人形なんだから。

「じゃあ、ここで少し待っていてください」

職員室から少し離れた応接室の前で真耶は言った。

「はい。分かりました」

「あつ……そうそう。実はですね、今日はデユノア君の他にもう一人、転校生がいるんですよ。もう中にいますので転校生同士、仲良くしててくださいね」

「はい。（私——ボクの他に転校生がいるなんて、珍しいなあ）」

シャルロットの心を消し、シャルルとして部屋に入った。

部屋には確かに一人の女子生徒がシャルルに背を向けて座っていた。

女子生徒がシャルロットに気づき、振り返った。

「あれ、アナタがもう一人の転校生？ 初めまして。私の名前は織斑なつきよ。よろしくね」

膝まで伸ばした長く艶やかな黒髪の端を赤い髪留めで止めた、少し釣り目の女子生徒。どこか人懐っこい笑みを浮かべて立ち上がり、シャルルに近づくと白い手袋を付けた右手を出して握手を求めた。

その笑みと雰囲気で、不思議とシャルルの警戒心は薄れてしまった。

「あつ、はじめまして。ボクはシャルル・デュノアです。よろしくね。織斑さん……織斑？ もしかして織斑千冬さんの関係者の方ですか？」

デュノア社の事前調査では、織斑と言う苗字を持つのは教師の織斑千冬と調査対象である織斑一夏だけの筈だ。

シャルルの言葉に、なつきはむーと言葉を漏らし、複雑な表情を浮かべた。

「あー、関係者と言えば関係者かな……まあ、その何て言うか、いろいろと複雑な事情があるのよねー。私に関しては。まあ、単純に言っちゃうと借りてるのよ。苗字」

「借りてる？ えっと……どういうこと？」

「私ね。自分の名前とISの事以外、思い出せないの。ほら、何かと話題になる記憶喪失ってやつなの」

「き、記憶喪失なんですか？」

「ええ。そうなの。びっくりした？」

そう言っただけにこり。初対面のシャルルに対し、まるで昔から知っている友達のように満面の笑みを浮かべてくる。ぽつとヒビだらけのシャルロットの心に、温かい何かが宿った気がした。

「そ、それにしては元気なんだね」

「まあね。くよくよしても仕方ないし、なるようになるでしょう？ それにしても……シャルル・デュノア……？ 何かどこかで聞いた事ある様な無い様な……」

腕を組みながら小さく唸るなつき。その時、シャルルはある事に気付く。右手に白い手袋をしているのだが、左手はしていなかったのだ。何か右手に傷でもあるのだろうか、そんな風に考えた。

「シャルル・デュノア……シャルル……シャル……シャル、ろつと？」

どくんつと心臓が高鳴った。どうして私の名前を言えたのと聞きたかったが、今の自分はシャルル・デュノアだ。

「えっ……シャ、シャルロットって誰？　ボクの名前はシャルルだよ？」

動揺を、そして尋ねたい気持ちを無理やり抑えつけ、シャルルは極めて明るめの声で言った。

「……そうよね。何で私、シャルロットなんて言ったんだろう？」

自分で口走った事だが、理解出来ないとはかりに大きく首をかしげるなつき。

「さ、さあ。ボクが分かる筈ないじゃないか……」

「そりやそうよね。ごめんね。変な事言つて。お詫びに私の事になつきって呼んで。私もシャルルって呼びたいから」

「うん。じゃあ改めてよろしくねなつき」

「ええ。よろしくね。——ところで知ってるシャルル。私達が転入するクラスに、あの織斑一夏がいる事」

「うん。知ってるよ。会つのが楽しみだね。有名人だから」

「そうよね。楽しみよね。ふっふふ……」

「な、なつき。何か顔が怖いよ……？」

「そう……何かわくわくしてきちゃってね。シャルル……面白いモノを見せてあげるわよ。ふっふふ……」

にたりと笑うその顔は明らかに何か、悪い事を考えている顔だった。

何を企んでいるのだろうか？ 間違いなく何かとんでもないことをしでかしそうだが、聞いても教えてくれないだろう。

その時、チャイムが鳴ると同時に二人を迎えに来た真耶が入ってきた。

「きゃああああー！！！！」

「男子、二人の男子！！」

「しかもうちのクラス！」

「美形。それも守ってあげたくなる系の！！」

シャルルの登場は一年一組のクラスメイトを狂喜させた。何せ織斑一夏に続く二人目の男子。それも一夏とは対照的に顔立ちが整った小柄な男子生徒。必然的に女子高的なノリとなるIS学園では凄まじく盛り上がった。

「みなさん。静かにしてください。転校生はもう一人います」

麻耶がクラスを沈める。確かにもう一人にいる。

(あつ……物凄く嫌な予感がする)

シャルルが隣に立つなつきを見て思う。先程の黒い笑みとは真逆の、そしてどこか深窓の令嬢を思わせるたおやかな笑みを浮かべているなつきの顔。

案の定、なつきはとんでもないモノを投下した。

「初めまして。織斑一夏の許嫁の織斑なつきです。夫との初々しい思い出を作るためにこのIS学園に入学してきました。皆さん、よろしく願いします♪」

なつきは貞淑な妻のように一礼した後、満面の笑みを浮かべ、爆弾を炸裂させた。

静寂に包まれるクラス。誰もが言葉の意味を理解できず、沈黙する。

きつちり一分。

教室が大きく揺れた。

「なにになににいったいどういことおおー……!!!!」

「い、許嫁!? なに、それって本当にいたの!?!」

「おっ、おお織斑君。どういこと詳しく聞かせてえー……!!!!」

一斉に喋りだし、織斑一夏に近づくクラスメイト達。漫画のような出来事に驚愕の悲鳴が木霊する。

「い、iiiiiiii一夏。どういうことだああー！ー！
！！！」

「ほ、箒落ち着けええ！！ 胸ぐらを掴むな。極つてるぞ！
？」

「一夏さん。納得の説明を要求しますわー！ー！ー！！」

騒然となる教室。特に篠ノ之箒とセシリア・オルコットの動揺は激しく、半狂乱と言ってもおかしくなかった。

「一夏。許嫁とは何だ！？ 一体いつの間にそんな約束をしたんだ！？」

「し、知らねえよ？！ オレだって今、初めて――」

「そ、そんな……子どもの頃、一夏君言っただじゃない。『オレのお嫁さんにしてやる』って。だから私、その約束を信じて、家出までしてここまできたのに……それにお医者さんごっこで私にこんなことまでしておいて、酷い……！」

肩を震わせ、手で顔を覆い、涙声で呟くなつき。しかし、口許は愉悅に歪んでいる。明らかに嘘泣き、演技だがそんなモノは一夏達に見えず、箒とセシリアは目尻をつり上げらせ、一夏を睨み付けた。その視線、睨んだだけで殺せそうないおっかない。

「一夏ああ！！ 貴様、見損なっただぞ！ この愚劣！ 変態

！　よもやそこまで落ちぶれていたとは！！　成敗してくれる
！！」

「一夏さん。お医者さんごつこで何をされたんですか！？
ま、まさかあんなことやこんなことを……………い、いいい一夏さあ
ああん！！！！」

「だから知らないってえええええ！！　ほ、ほほほ。離
せ。死ぬから本当に死ぬー！！！！」

「み、皆さん落ち着いてくださーい！！」

副担任としての責務を果たすべく真耶が声を張り上げ、落ち着
かせようとするが焼け石に水の状態だった。

『ねえ、なつき…………』

と、なつきの隣に立っていたシャルルはこそつと耳打ちした。

『や、やりすぎじゃないかな？　死んじやうよ織斑君。止め
たほうがいいんじゃないかな？』

『えー。もうちょっと見ていましょう。わたし今、すごくゾク
ゾクして気持ちいいから』

(…………なつき。黒い…………)

内心、ぽつりと呟くシャルル。

なつきはさらに、業火にガソリンをぶっかけるがごとく、更な

る燃焼剤を投げた。

「そ、それに一夏君。あの時、そういうことが分からなかった私に、く……くわえさせたり、開かせたりしたのに……お、覚えてないんだあ……！」

涙声で訴えるなつき。笑いが入っているようだったが、山火事のように盛大に燃え上がり、冷静さを失っているクラスメイト達が気づくはずはない。

「一夏あああつあああつあああああああ……！！！！！！」

「一夏さあああああああああああああ……！！！！！！」

「濡れ衣だあつあああああああああああ……！！！！！！」

第、セシリア。limit break。一夏、死の危機。

「く、くくくわえ、たり……ひらかせ、~~~~~！！！！」

そんな喧騒の中、一人、何を想像したのか、シャルルが顔を茹で蛸のように真っ赤にして頬に両手を添えていた。意外と想像豊かなようだ。

「み、皆さん落ち着いてくださいいいい……篠ノ之さん。織斑君から手を離してください。白目を剥いています……オルコツトさん。教室内でISの展開はいけませ——皆さんお願いですから落ち着いてくださあああい……！！」

喉を張り裂けんばかりに叫ぶが、残念。真耶にはこの力オスな

状況を止める力はなかった。

そう。このカオスを止めれるとしたら、それはただ一人。

「下らないことをするな馬鹿者が！！」

「体罰っ！？」

ゴンツと鈍い音。颯爽と教室に現れ、絶賛嘔泣き中だったなつきの頭にげんこつを落とした人物こそ、我らが一年一組の担任、織斑千冬だった。

「全員静かにしろ！」

覇気のある声が教室に響き渡り、クラスメイト達は時間が止まったように静止した。同時に箒の手から力が抜け、一夏はずりりと床にへばりつくように倒れた。箒に激しく揺さぶられ、白目を剥いてぐったりしているが生きてはいるようだ。

「まったく。こんな下らないことをするとはな。お前は自分が置かれている状況は理解しているのか？」

ぎんつと誰もが息を呑み、硬直する視線をなつきに向けた。一夏なら某髭を蓄えた赤帽子の親父のように小さくなるが、なつきは特に臆する様子もなく、ぺろつと舌を出して「ごめんさない」と答えた。

「お前達。こいつの甘言に惑わされるな。全て嘘八百だ」

「そういうこと。ちょっとふざけ過ぎたみたい。ごめんね、み

んな。それと一夏もね」

一夏に近づき、両手を合わせて謝罪するなつき。どこか愛嬌のある仕草だった。

「……うう。酷い目にあつた。……つて、お前、確かあの白――
――「一夏」――千冬……織斑先生？」

千冬の制止の声。一夏が目をやると、千冬が小さく首を振っていた。

どうやらなつきが、あの『白騎士』に似たIS搭乗者であることは秘密のようだ。そういえばあの戦いが終わった直後にロックが解除され、観客席にいた生徒達が一斉に出されたのだ。戦闘に参加していたセシリアと鈴音は気を失っていたから、あの『白騎士』に似たISを操縦していた人間が誰なのか知っているのは教師を除けば、一夏だけなのだ。

「それじゃあ改めて自己紹介させてもらうね。私の名前は織斑なつき。ちょっとした事情から、こちらにいる織斑先生と一夏と同じ名字を名乗っているの。あつ、何で同じ名字かって言うのはトッブシュークレットなので聞いても教えてあげられないから、その辺りは察してね」

「……自己紹介はもういいな。さあお前達、実習の準備をしろ。遅刻は許さんからな。織斑はデュノアの面倒を見てやれ。いいな？」

「はい」

クラスメイトが動き出す。次の授業は二組合同でのISを使っ

た実習だ。ならシャルルを連れて更衣室に走らないと間に合わない。あいにく男子更衣室と決まっている場所は、アリーナの更衣室のため走らないと間に合わないのだ。

一夏はなつきの事で後で千冬から聞こうと心に決め、一先ず一緒に更衣室に向かうべくシャルルに近づいた。

「二対一……山田先生勝てるのか……？」

上空へと上がっていく三機のIS。少々のアクシデントがあったが千冬の命令で、実習前に模擬戦をすることになった。セシリアと鈴音を相手に、第二世代型IS『ラファエル・リヴァイヴ』を装備した真耶が戦うのだ。

「ふむふむ。一夏は山田先生のほうが気になるのか。一夏の好みは年上で眼鏡っ娘、そしておっぱいが大きい子……と。テンプレートだけど、なかなかいいところ突くわね。それにしっかりと掴んでいたしね」

「……」

いつの間にか、あのなつきが隣にいて、メモを取る仕草をしていた。何故か、右手だけ白い手袋をしていた。普通はISスーツのみ着用なのだが。

「どうしたの？」

何とも言えない目でなつきを見る一夏。それを不思議そうに首をかしげるなつき。

「お前……あの『白騎士』に似たISを操っていた奴だよな？」

顔を寄せ、小声で話しかける一夏。気を失う前だったが、確信に似たモノがあった。

「お前なんて言い方はやだな。なつきって呼んでくれていいわよ。ダーリン♪」

「冗談はいい。どうなんだ？」

「……おかしいな。一夏はノリがいいと思ったのに……まあそうらしいわ」

「らしいって……覚えてないのかよ？」

「ご明察。何であんな場所に落ちてきたのか、何で私のIS『ナイツ・オブ・ラウンド』が『白騎士』の姿に似ているのか、さっぱり不明。と言うか、自分の名前以外、思い出せないのよね」

あっけらかに言うなつき。その態度に一夏が目を丸くした。

「何だよそれ……記憶喪失なのか？ 訳分かんないねえな。ってか、不安じゃないのかよ？」

「不安だけど、無くなった訳じゃないでしょ？ 記憶喪失は

あくまでも記憶のプロセスにおける確認が出来ないだけ。いつか思い出せるわ。あつ、織斑先生から聞いたけど、何か私が一夏と戦っちゃったんだよね。ごめんね」

「いや、それはもう……ちょっと待て。お前が動かしていたんじゃないのか？」

「違うわよ。『ナイツ・オブ・ラウンド』には搭乗者保護システムみたいなのが搭載されていて、私に危機が及ぶと自立行動に移行するの……たぶん」

なるほど。確かにあの時、先制攻撃を仕掛けたのは一夏達だ。筋は通っている。しかし、なつきが操っていないなら何故、ISは箒の方へと飛ぼうとしたのだろうか。

「たぶんって何だよ。自分のISだろ？」

「言っただでしょう。私、記憶喪失だって。だからわずかに覚えていることもちよーとばかりに自信が持てないのよね。あつ、名前は確実だけど。それと、この件には箒口令が敷かれているから、他の人には話さないでね」

「だろうな。分かった。後、もう一つ聞いても言いか？ 何で転校生として入ってきて、織斑の名字を名乗ってるんだ？」

「単純に言っちゃうと政治的駆け引きかな。各国は『ナイツ・オブ・ラウンド』が欲しいんだけど、獲得するだけの理由と権利がない。その理由と権利を得る為の時間稼ぎをする為、私をIS学園に入学させたの。一応、ここはどんな力も作用しない場所だしね。苗字は私の身元保証人に織斑先生が立候補したからよ」

「なるほどな」

確か、生徒手帳に記載されていた特記事項にそんな事が書かれていたな、と一夏は呟く。一応、後で目を通しておこうと思った。

「法律やら規則は覚えておいた方がいいわよ一夏。」今の自分の手の届く範囲”でなら知っていて損な事はないからね。――と、そろそろ決着がつきそうよ」

そう言つて上を見上げるなつき。一夏もとりあえず上を見上げた。だが、かなり高いところまで上がっているのか、状況がよく分からない。

「分かるのか？」

「何となく、だけどね。勝つのは間違いなく山田先生」

「その根拠は？」

「んー……得物が良くても、使い手が未熟なら――」

ドンと言う爆発音。そして何かがきりもみしながら落下してくる。

「負けるに決まってるでしょう？」

なつきが言った直後に、何かが地面に激突し、盛大な土煙とクレーターを作り上げた。落ちてきた何かとはセシリアと鈴音だった。絡まり合った系の様な状態でお互いを非難する二人。

「ほらね」

「つまり……ISが凄くても、操縦者が優れていたら性能差は補えるって事か？」

「むしろそこが重要よ。ISってあくまでも人間に使われてこそ、真価を発揮するモノだから。っと、一夏。これから改めてよろしくね。たぶん、色々と迷惑をかけるかもしれないけど、そのところは男の広い心で許してね」

人懐っこい笑みを浮かべて、手を差し出すなつき。不思議と受け入れている自分がある事に苦笑し、一夏はその手を握りしめた。

——— 今、ここに決して出会う筈のなかった二人が出会い、運命はゆっくりと新たな流れを作り出そうとしていた。

第三話（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

誤字脱字、感想をお待ちしています。

第四話（前書き）

銀髪眼帯娘の本格的登場は次に変更となりました。今回はちょびつとした出てきません。

PVが5000を超えて、さらにお気に入りが20件を超えました！

皆様、ありがとうございます。この調子でどんどんがばって行きます！ PV、お気に入りに入り、そして感想の数字が増えれば増えるほど、ホーエンのエンジンが上がっていきますので、よろしく願いします！

第四話

「ほらっ、しっかり歩かないか！」

IS学園学生寮の廊下にて、篠ノ之箒の鋭い声が響き渡った。その顔は不機嫌不愉快と言う文字がありありと浮かび上がっている。何事かと思つてちょうど廊下に出てきた生徒達を見ると、直ぐにその理由を察した。

「ねええええむうううういいいいいい……」

箒に手を引つ張られながら歩く、箒の同居人。昨日転校してきた織斑なつきは未だ夢の中にいた。

「ほあゝおおゝきいゝねえゝむうゝいいゝゝゝゝ」

「知るか。とつとと起きろ！ 寝起きが悪いにしても限度があるぞー！」

がっとなつきが起きるが、なつきは「むゝ……」と声を漏らし、嫌そうに歩く。

「……何やってんだ。ほつき。なつき」

ちょうどその時、曲がり角から現れたのは織斑一夏とシャルル・デュノアだった。

「い、一夏か。見ての通りだ。ええーい！ さっさと起きろ！ 置いていくぞ！」

「やああだああ……おおりいむうらあせえんえいいいにお
おこおらあれえたあくうなあい」

「ならばさつさと起きないか！！」

ぶんぶんと箸はなつきの胸ぐらをつかみ、頭をぐらぐら揺さぶる。
常人なら間違いなく起きるのだが、それでもなつきの意識は未だ眠
りの世界に入ったままだった。

「すげえ……まだ寝ぼけているぜ」

「うん。なつきつてすごい低血圧なんだね……」

「……ああ……いいちいかあ、シャルウルウ、おおはお
よおう……」

ゆつくりと重たげに片手を上げ、挨拶する寝ぼけなつき。普段の
活発、快活のなつきのイメージとはほぼ対照的な姿がそこにあった。

「お、おはよう。なつき。い、いい加減に起きたらどうだ。箸が
切れかかってるぞ」

歯を食いしばり、唸り声を上げている箸。

「だあゝいいゝじょあゝううゝぶうゝ……ほおうきいはやあさ
あしいいいかあらあ……そおれえにい、やあくうそあくうしいたあ
かあらあゝ……zzz」

「約束？」

そう言って、一夏が筈を見る。

「……安請け合いしてしまったのだ。低血圧だから、朝起きるのを手伝ってほしいと懇願されてな……だが、まさかここまで酷い低血圧だったとは……ああー、本当においていくぞー!」

「……おいいてえったあらあゝ。きいのおううのこおとあゝ、おとおおごええでえさあけえんでえやるうゝ……」

ねばけ顔だが、どこか意地の悪い笑みを浮かべて言っなつき。かつと筈の顔が何故か赤くなつた。

「き、貴様、私を脅迫するつもりか!？」

「きよおおおはあくうなあんてえゝ、とおんでえもおなあゝいゝ……こおれえはあゝやあくうそあくうのおさあゝいいかあくうにいんだあよあゝ……」

「くううう……卑怯者め!」

「そおれえはわあたあゝしいにゝしいてえみいれえばあ、ほおめえこおとおばあゝゝゝゝゝゝ」

「おとおおお、おのれええええええええええー!……!……!」

「なあ、筈。昨日の事つて何だ?」

「い、一夏には関係ない! お前は黙っている!……!」

そう言つて、箒はずるずるとなつきを引きずり、食堂へと向かつて歩いていく。その背中をしばらく見送った一夏がぼつりと呟いた。

「何だあれ？」

「さあ……」

シャルルが首を傾げて答えた。

「いやあ、ありがとう箒。流石は武士の心を持つ女の子。やっぱり義と仁の心が備わっていたね」

「……」

食堂で箒に朝御飯すら食べさせてもらい、ようやく覚醒したなつきは実際にこやかな顔で隣に歩く箒に声をかけた。

しかし箒はなつきと喋る気にはならない。それも当然の事だろう。朝からあんな面倒を掛けさせられた上、脅迫紛いな事を言われたのだ。どうやっても友好な関係を築こうとは思わないだろう。

「ねえなつき。朝はいつもあんな感じなの？」

シャルルが尋ねる。なつきの提案で一夏、シャルルと一緒に登校する事になったのだ。

「うんたぶん。何か昼と夜は活発なんだけど、朝はその反動みたいな感じであんな感じになっちゃうのよね」

あつはははと、気持ちよく笑うなつき。簾は明日も同じ事が起こるのかと思うと、気持ちがどうしても億劫になってくる。人知れず、大きなため息を漏らした。

「早く寝てもそうなるのか？」

と、一夏。

「なる。間違いなく」

むんつと胸を張るなつき。簾並のたわわに実った双丘が大きく揺れた。それを目撃してしまった一夏が僅かに顔を赤くする。

「……い、いや……そんな自信たっぷり言われても誇る事じゃないぞ」

「春と秋はベッドの上で過ごし、夏はクーラーの前に移動して、冬はコタツから出ない！それが私！」

「駄目人間の典型だろうそれ」

「何を言っているの。それが出来るのは世界が平和って事よ。私の行動は世界が平和だからできる事なのよ。むしろ、みんなに推奨したいくらいだわ」

「ボクはやだな。そんなの……」

「えゝ、シャルル一緒にしようよ。何、最初は苦痛かもしれないけど、時期に良くなってくるわよゝ……だから私に全て委ねなさい」

わきわきと手を動かし、口元を大きく歪めて迫るなつき。

「な、何か手つきと顔がいやらしいよ。なつき」

思わず体を抱きしめ、一步離れるシャルル。身の危険を感じたようだ。

「ふっふっふっ……大丈夫よシャルル。さあ、このなつきさんに全てまっかせなさああい！」

「うひゃああっ!?!」

襲いかかるなつき。逃げだすシャルル。そのまま二人は学生達の中に消えて行った。

「……何か面白い奴だよな。なつきって」

本当、凄惨な行動を起こしたあの『白騎士』に似たISの操縦者とは思えない。

「……面白い奴なんかじゃない。迷惑で面倒臭い奴だ」

無然と、言葉に不機嫌を隠そうとしない筈が呟いた。

「そうかもしれないけど、明るくていい奴だと思っぜ。昨日転校

したっていうのに、もうクラスのみんなと仲良くなっているし」

人付き合いはかなり上手のようだ。放課後には既に複数のクラスメイトと遊びに行ったらしい。

「ふん。毎朝、アレが続く私の身になってみる」

「それは……ご愁傷様としか言いようがないな。……ああ、オレも手伝ってやるよ。第一人じゃ大変だろ？」

それを聞いた箒の体がびくりと震え、慌てたように一夏を見た。

「てつ、手伝う?! そ、それは朝、わたしの部屋に来ると言う事か!？」

「ああ。実はさ、千冬姉になつきの事、気に掛けてくれて言われてんだ。あいつ、記憶喪失で自分の名前とISの事以外知らないみたいなんだ」

だが、正確にはもう一つの意味もあるだろうな、と一夏は心の中で呟いた。

「ああ。記憶喪失なのは聞いていたが……まさか本当だったとは……」

「冗談だと思っていた。昨日の顔合わせで至極明るい顔で言う物だから、信じられなかったのだ。

「ああ。ある意味、強い奴だよな。で、どうなんだ? 箒が嫌ならやめとくけど……」

「い、いや是非頼む！ 私一人でアイツの面倒をみるのは大変だ。お、お前がいれば少しは私が楽をできると思う……！」

「ああ。じゃあ手伝ってほしい時はいつでも言ってくれよ」

「う、うむ。期待しているぞ一夏」

「任せとけ」

これを棚から牡丹餅と言つのか。まさか一夏が手伝ってくれると言つ嬉しい展開に発展するとは。

自然と箒の足取りは軽くなり、さっきまで心を占めていた億劫な気持ちはきれいさっぱり消えていた。

「一夏。アンタ、ラウラって子に何をしたの？」

「分からねえよ。と言うか、初めて会ったんだから何をどうする事も出来ないだろ？」

お昼休みの学生食堂の一角。なつき、一夏、箒にシャルル、そしてセシリア・ウォルコットが陣取っていた。既にそれぞれのお昼ご飯はテーブルの上に並んでいる。

話題に上がっているのは今日の朝起こった、転校生ラウラ・ボーデヴィツヒの事だった。簡潔格短く自己紹介した彼女はその後、何と一夏にビンタし、一夏の存在を認めないと言う言葉と明らかに敵意を持った視線で睨みつけたのだ。

その後の彼女もひたすらクラスメイトに近寄りがたい冷徹且つ威圧的な雰囲気を出し、午前中のクラスの空気は随分とギスギスしていた。

「でもさ、いきなりビンタされるってよっぽだよ。ねえ？」

そう言っ隣に座っていたセシリアに同意を求めた。

「そうですね。一夏さん。本当に心当たりがないんですか？」

「……あると言えばあるんだけど……な」

一夏には思い当る事があった。

ラウラはドイツからの留学生で、姉である千冬の事を教官と呼んでいた。これから導き出される答えは、ドイツへ赴任していた頃の千冬の教え子と言っになる。たぶんその辺りの事だろう。

「ふうん……何か込み入った事情がありそうね。まあ、深くは訊かないわよ。友達でも立ち行っちゃいけない領域はあるしね」

ぱくぱくとお昼のランチを口早に放りこむなつき。

「ああ……って、なつき。お前、食べれるのか全部？」

なつきの前に置かれたランチ。それは普通の量ではなかった。内容は焼き魚定食だが、ご飯はどんぶり大盛りで味噌汁が入った器も一回り大きい。焼き魚も三匹、その他の付け合わせも最低二倍以上の量だった。

「凄い量だね……見ていただけでお腹一杯になりそうだよ」

シャルルが言う。

「私の体は燃費が悪いのよ。だからこれぐらい食べないと、持たないのよ私は」

そう言っただけで焼き魚の頭を齧り、バリバリと音を奏でながら食べていく。骨だろうが関係なし。

「……魚の頭を食べる女の子、初めて見たぜ……」

「カルシウムよカルシウム。自然の恵みはありがたく頂かないかね」

「でも、なつきさん。それだけ食べて太らないのですの？」

セシリアが女の子なら誰もが気にすることを口にした。

「太らないわよ。私、太らない体質って言うか、栄養が全部ここに行っちゃうのよね」

そう言って、なつきは豊かな双丘を指差す。

えっ……と一夏が言葉を漏らす。

「太らないのは嬉しいけど、肩が凝るし、合うブラも少ないし……胸が大きいって言うのは皆が思うほどメリットがないのよ？むしろデメリットの方が多いわ。さっきも言ったけど、まず酷い肩凝りに悩まされるし、可愛いブラはなくて、どうしても胸を強調するデザインしかない。町を歩けば男からはいやらしい視線を向けられて、頭ん中でぐちゃぐちゃに妄想されているだろうし、女の子からは憧れと嫉妬、殺意の視線を向けられるし……分かった一夏？意外といいモノじゃないよ。胸が大きいのは」

冷静に述べた後、ずずずと味噌汁を啜るなつき。影で箒が納得している様に頷いていた。

「な、何でオレにその話題を振るんだよ!？」

一夏が真っ赤になって声を上げた。

「いや、シャルルに振ってもいいんだけど、やっぱり一夏のほうが面白い反応が返ってくると思ったから……それで一夏はどっち派？ 巨乳派？ 貧乳派？ あっ、巨乳派だったわね」

「ば、ばば馬鹿かお前は?! って言うか、女の子の言う事じゃないだろう?! それに勝手に決め付けるな!」

「あら、それは間違いよ一夏。男も女も関係ないわ。誰だって等しく興味がある事だと思うわ。それにそういう事に興味を持つのは何もおかしい事じゃない。むしろ、正常な十代として当然よ。で、一夏は巨乳派じゃなかったの？ たまに山田先生の胸を凝視しているから、私や箒、セシリアが有利だと思ったんだけど……」

その瞬間、ぱつと箸とセシリアが恥ずかしそうに胸を隠した。その反応に一夏がますます焦る。

「見てない見てない！！ 一体オレがいつ見たんだ！？」

「あら、私はちゃんとチェックしているわよ。昨日の五時間目、ずっこけた山田先生の胸が教卓に押し潰された瞬間、顔を赤くしていたじゃない？」

「なつ、何でお前の席から見えるんだよ！？ 一番後ろの席でオレの顔なんて見えないだろうが！？」

「ムキになつて否定するところが怪しい……ふむふむ。一夏はやっぱりむつとりオッパイ好き……と。よかったわねー箸、セシリア。この辺りで攻めれば一夏を……」

「なつき。お前はもう黙っている！」

「なつきさん。それ以上、口を開かないでくださいまし！」

真っ赤になり、吠える箸とセシリア。

何ともにぎやかな食卓である。そんな中、シャルルがくすくすと笑いだした。

「ん、どうしたシャルル？」

「うん……何かとても楽しいなと思ってね」

「オレは全然楽しくないけどな。勝手にオレのイメージが作られていくと言つか……」

無然とした表情で答える一夏だが、シャルルは心底楽しそうに小さく笑い続けている。

「くすくす。ご愁傷様一夏。でも、凄くいいな。この感じ。いつまでも続けばいいなあ」

あの場所にいた時とは大違い。正反対の空間が、楽しくて賑やかな空間がここにある。もし父親からの命令さえなければもっと楽しめたのに……とシャルルは最期に寂しそうな笑顔を浮かべた。

「シャルル」

と、なつきが声をかけた。

「いつまでも続くに決まっているじゃない。少なくともここにいる間、ずっとこんな感じよ毎日。ねえ、一夏？」

心を読んだように、この日々は続くと言ったなつき。その言葉がシャルルにはとても嬉しかった。

「……それはオレが毎日いじられると言う事か？」

「分かっているじゃない。頑張りなさい」

「……最悪だ」

がくつと一夏は肩を落とした。

数日が過ぎて週末の土曜日。一夏は午前中の授業を終え、いつも通り素晴らしいコーチ陣と共にアリーナで自主トレを行っていた。IS学園では、土曜日は午前中まで理論学習の授業があつて、午後からは自由になる。未来の代表候補生を目指す生徒達の大抵、全解放されるアリーナでそれぞれトレーニングをするのが通例だった。

「だから何度言わせれば理解するんだ。こう、ずばーっとやつて、ガキンっ、ドカーンと言う感じだ！」

「何となく分かるでしょ？ 感覚よ、感覚。はあ、何で分からないのよ?! この馬鹿！」

「防御の時は右半身斜め上前方へ五度、回避の時は後方二十度ですわ。そして接近する際には常に防御を意識して体を――」

「率直に言わせてもらつ。――全然分かん！」

素晴らしいコーチ陣の指摘に、『白式』を起動させた状態の一夏が吠えた。

「……箒は抽象的で、鈴音は感覚的、セシリアは理論的……全部足して二で割ればちょうどいい説明になりそうね」

「そうかもしれないね……」

ほぼ観客と化しているなつきとシャルルが他人事のように答えた。

「何で分かりませんの。このわたくしの理路整然としたアドバイスが!？」

「セシリアは細かすぎて難しすぎる! 五度やら二〇度やら言われてもどのくらいなのか分からないって!」

「じゃああたしは!？ あたしのは簡単でしょ!？」

「お前の感覚なんか分かるか! 大体、説明があやふやだ!」

「私のは——!」

「箒のは極めつけだ。がきいん、ドカンなんて擬音で理解できるか!？ オレはニュータイプか!？」

「———そういえばシャルル。聞いた? 今月の学年別トーナメントの噂……」

それは女子の間で流れている話で、何でも今月の学年別トーナメントで優勝すると一夏と付き合える権利が貰えると言う、正直かなり眉唾物の噂だ。しばらく一夏と付き合い分かった事だが、この男は殺人的に鈍感だ。大抵の男なら分かる女の子のアプローチやフラグををあっさりつぶち壊す。それを分かっているなつきとしては、この話がとんでもなくねじ曲げられたか、嘘かと判断していた。

「なにそれ？ 知らないよ。どんな噂なの？」

「……知らないならいいわ。他愛ない事だから」

知らないなら知らないでそれは面白い。となつきは心の中でにやりと笑みを浮かべた。ちなみに、シャルルと付き合えると言う噂も流れ、上級生の間では血走った目で訓練している生徒もいるらしい。

「——まあ、それは置いといて、どちらかというと一夏は、頭で覚えるより体で覚えるほうみたいね」

「うん。ボクもそう思うよ。と言うことはやっぱり、模擬戦形式でトレーニングするほうがいいのかな？」

「でしょうね。出来るだけ多くの、それも様々な状況の模擬戦を用意して、それを経験値にするしかないわ。うーん。これはまた将来が有望だけど、時間がかかるタイプよね」

「そうだね。大器晩成タイプだよ一夏は……それにしてもなつきすぎいいね。よく観察してる。それにアドバイスも的確だし……本当、記憶を失う前はどこかの国の代表候補生だったんじゃない？」

「それならそれで、自分の居場所が見つかってるんだけどね。シャルル。一夏の訓練付き合ってくれる？」

「ボクは全然構わないよ。でも具体的にどんなことをするの？」

「拡張領域に射撃武器って一通り持っていたわよね？」

「うん。大体揃ってるかな」

「OK。一夏。ちょっとこつち来てー!」

三人に反論していた一夏がなつき達の元にやってくる。

「一夏。アンタ、今からもう一回シャルルと戦いなさい。アンタの場合、ごちゃごちゃ言われるより体験したほうがいいでしょ?」

「シャルルと?」

「うん。お手柔らかにね一夏」

にこりと笑い、一瞬で専用IS『ラファール・リヴァイヴ?』を装着するシャルル。

「いい一夏? アンタがセシリアに鈴音、シャルルに勝てない最大の理由は、機体の強みと弱味を完璧に理解できていないからよ」

「———どういうことだ?」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、誰よりも射撃武器の特性を理解しなくちゃ対戦には勝てないんだ。『瞬時加速』も直線的だから反応できなくても、予測軌道で攻撃できちゃうからね」

「つまりこちらのシャルル先生のおっしゃる通り、アンタがまず頭や体に叩き込まなくちゃいけないことは、機体の操縦より射撃武器の特徴な訳。だからこれからシャルル先生にそれを一夏に叩き

込んでいただきます」

「……なるほど。で、具体的にどうすんだ？」

「これは私を師事してくれた人のやり方でね。シャルル、アンタはこれからショットガン、アサルトライフル、スナイパーライフルの三種類を使って一夏を追い詰めて。一夏は最初は攻撃しないで相手の武器の有効射程範囲に応じて間合いを変えなさい。その際、回避出来なくてもいいから、”被弾しても最もダメージが少ない距離”にいるように心がけなさい。……この訓練の目的は分かる。一夏？」

腕を組み、しばし唸った後、一夏ががくりと頭を下げた。

「……すまん」

「一夏。ショットガンが一番効力を発揮する距離は、近距離、中距離、遠距離のどこ？」

「そりゃあ近距離だろう？ 散弾ばら蒔くんだから」

「じゃあスナイパーライフルは？」

「遠距離……そうか。つまりそれぞれの射撃武器の最も威力を発する距離を見極めろってことなのか？」

「正解よ。これは瞬時の判断でそれぞれの射撃武器の特徴、射程範囲を把握するための訓練なの。防御するにしても回避するにしても、まずはその武器の特性を完璧に理解しなくちゃ最善の行動は取れないわ。それが出来るようになってきたら、次は限定した模擬

戦ね。鈴音がアンタの近接戦闘技術アップを目的とした近距離格闘戦、シャルルが間合いの判断と実戦的な機動技術アップの中距離機動戦闘、セシリアは回避を重点に置いた回避機動技術アップの長距離回避戦をして、アンタを格闘戦特化型の操縦者にする」

「……すげえな。なつき。まるで専門家みたいだぜ」

「うん。ボクもびっくりした……」

「………実は言った本人が一番びっくりしているんだけどね。何か矢継ぎ早に口から出てきて……いやぁ…本当、私って何者なんだろうね？」

不可解だと言わんばかりに、大きく首をかしげるなつき。それはオレも知りたいよ、と一夏が心の中で呟いた。

「まあ、私の事はいいわ。いつか思い出すだろうし、今は横にポイツとしときましょう」

「普通、不安になる所だぞ？ よくもまあそんなポジティブって言うか、能天気な片づけられるな」

「ボクもそう思う。本当、なつきって前向きだよ……」

半分呆れ気味に言う一夏とシャルル。

「はっはっはっ、褒めても何も出ないわよ」

と、その時、アリーナがざわついた。何事かと思って、三人が周囲を見回す。すると、生徒の一人がアリーナの選手発進口を指差し

ていた。

「ちょっとあれ……ドイツの第三世代じゃない!？」

「うっそ。本国でトライアル段階だつて聞いていたけど……」

大型レールカノンを右側に装備し、黒を基本したIS。ドイツの第三世代IS『シュヴァルツェア・レーゲン』。その搭乗者は――。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

「出た。一夏をひっぱ叩いたドイツの代表候補生……」

「っ……」

セシリア、鈴音、箒が忌々しそうにラウラに視線を向ける。

「ふむ……一夏。どうやらアンタにご指名みたいよ」

なつきが肩をすくめて、一夏に言った。

ラウラの視線は、明らかに一夏だけに向けられている。その眼に宿っているのは怒り。その瞳に宿っているモノを読み取ったのか、一夏がどこか緊張した顔でラウラへと体を向けた。

第四話（後書き）

第四話。読んでいただいております。

誤字脱字、感想をお待ちしております。

私のIS二次は原作とアニメの混合となっております。

一応、原作どおりに進めていきますが、いろいろと独自の設定を織り込みますのでお楽しみいただければ幸いです。

では、また！

第五話（前書き）

……いい感じで筆が進むな。すごくいい感じだ。

さて、ようやく銀髪娘が登場です。一夏と絡ませつつ、なつきとも絡ませようと試行錯誤中。タッグバトルは原作から大きくかけ離れる予定です。

PV大台の10000を超えました。祝！ 皆様ありがとうございます！

第五話

『ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐。まずは何も聞かず、この映像を見る』

薄暗いブリーフィングルーム。ラウラの前に立つ中年の大佐は簡潔にそう言った。一〇〇インチはあるうかと思われるスクリーンに投影されたある映像記録。それはラウラが、これから入学するIS学園の起こったある模擬戦の極秘映像だった。

日本で発見されたISを操縦出来る男子、織斑 一夏と中国の代表候補生凰 鈴音との模擬戦。最初、その映像を見ていたラウラの顔がどこか険しかった。

それもその筈だ。ラウラの理想の象徴。憧れ、なりたいと思った完璧な存在に、一点の穢れを作った殺してやりたいほど憎い敵がいる。見るだけで吐き気がするし、視界に入っているだけでも不愉快な気持ちだ。命令でなければすぐさま映像を投影しているプロジェクトを粉碎している事だろう。

お粗末な戦いの映像が続く。それは自分の興味のない分野の映画を強制的に見せられる気持ちに似ていた。

（めざわりだ……）

ぼつりと心の中で感想を漏らす。憎しみと苛立ちを込めて。

だが、そんなつまらない映像に変化が起こった。何かがお粗末な

戦いを遮り、現れたのだ。

土煙が晴れた先に現れたのは黒い巨人のようなIS。両腕が異様に長く、ヨーロッパは元より世界各国で開発されているISのデザインと合わない全身装甲のISだ。

『このISについては気にする必要はない。だが、次に現れたISには注目しろ』

軍人としてそう命令されれば気にする必要はない。ラウラは僅かに湧き上がった興味を消し、再び映像に注視する。

しばらくその異形のISとの戦闘が続く。何と陳腐で幼稚な動きだ、と見下した眼で見つめる。

忌むべき敵、そして有象無象の二つが何とかして異形のISを撃破する。これまでの再生時間はそれなりに長い。

一体上官は何を私に見せたがっているのか？ このあまりにもお粗末な戦いなのかと思ひ始めた瞬間、再び何かがアリーナのフィールドを突き破り、地面に激突。異形のIS以上の土煙を巻き上げた。

『ここからだ』

上官の声が僅かに強張った。ラウラが一つの変化を見逃さないとばかりに、さらに映像に注目し——大きく眼を見開いた。

土煙が晴れた先、異形のISが振り払った腕をあつさりと受け止める白銀のISがいた。

白銀の装甲を纏う中世の騎士を思わせる姿。細部こそ違うがその姿は軍関係者なら誰もが知っている姿に酷似している。当時では常識の範囲外、現実とは思えぬ光景を作り出し、一度はラウラに『出来そこない』の烙印を刻みつけたISと言う兵器を世に知らしめた伝説の機体。『白騎士』によく似た姿だった。

映像は己の役割を忠実に果たし、再生され続ける。ここからは驚愕の連続だった。

忌むべき敵と中国、英国の代表候補生、三機のISが立ち向かっていく。放たれるオールレンジ攻撃とレーザーの雨。剣を振りかざす二機の猛攻。連携の精度こそ低い、それなりに激しい攻撃だ。だが『白騎士』によく似たISは、全てを見通すかの如くかわし、圧倒する。

完璧だった。攻撃予測から回避機動まで、全て紙一重の位置で回避している。それだけでこのISの性能——ひいては搭乗者の技量が馬鹿げたレベルであることを理解した。

映像はラウラの忌むべき敵を地面に叩き付けたところで終わった。スクリーンにはただ光だけが投影されている。

『感想を聞こう』

簡潔に上官が問う。

『——論ずる術を持ち得ません。何もかもが桁違い……いえ、常識外です』

内心の動揺を言葉に出さず、ラウラは冷静な口調で答えた。

『もし君の部隊と戦う事になったら、君はどう戦うかね？』

その質問にラウラは目を閉じ、頭の中でシュミレートした。

ラウラが指揮するドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ（黒ウサギ隊）』。ドイツが保有する総IS数は十機で、その内三機も配備している名実ともにドイツが誇る最強部隊。

『——戦いになりません。おそらく三十分と持たず全滅します』

その最強部隊を率いてシュミレートしたラウラは悔しがる事も無く、ただ一つの結果、事実として答えた。

ほんの十秒程度の時間だったが、ラウラは頭の中でありとあらゆる状況下で、あの『白騎士』に似たISとの戦いをシュミレーションした。だが結果は全て同じ。何をやっても仕掛けても、自分の部隊が完膚なきまでに破壊される光景しか出てこなかった。

『ふむ。我々と同じ見解だな。見ての通り、このISは本気で戦っているようには見えない。五分、いや、三分の力すら出していないだろう。それでも尚、この性能……国の代表候補生に対し赤子の首を捻るように倒した。もしこの搭乗者が本気で戦っていれば、おそらく彼らは十秒と待たず終わっているだろう』

『はい』

完璧だ。圧倒的な力の体現者。何者にも屈さぬ、邪魔する者は全てその力を持って粉碎する。ぞくりと、ラウラの背筋が震えた。

『表向き、IS学園の”狸”と委員会はこの事実を隠してはいるが、既に情報は様々な場所に流れている。ありとあらゆる国家、企業がこの機体と搭乗者を手に入れようと躍起になっている。それも当然だ。この機体のスペックはまさに桁違い。現在の開発中の第三世代型ISが旧式の兵器に見えてしまうからな』

スクリーンには『白騎士』に似たISが行った『瞬時加速』の映像が映される。残像すら許さぬとばかりの瞬間移動にも似た加速性能と減速性能。ISの浮遊、加速減速を司る基本システムバッシュ・イナーシャル・キャンセラーへPICバッシュ・イナーシャル・キャンセラーの精度は桁違いに高いが故に出来る動きだ。あの場所にいたら、レポートしてきたのかと思うだろう。

『この機体がどこで開発されたのか不明だが、おそらく篠ノ之束が関わっていると見て、まず間違いないだろう。だがそんな事はどうでもいい事だ——ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐』

『はっ！』

びしっと踵を合わせ、背筋を伸ばすラウラ。

『君の任務は二つだ。一つは我が国の第三世代型IS『シュヴァルツェア・レーゲン』の実稼働データ収集、そしてもう一つはこの規格外のIS『ナイツ・オブ・ラウンド』及び操縦者であるナツキ・オリムラの調査だ』

ぴつと一人の少女の顔が投影された。

ドクンツとラウラの心臓が高鳴った。

『……大佐。質問をしてもよろしいでしょうか？』

『許可する』

『その『ナイツ・オブ・ラウンド』の操縦者は、織斑教官の身内なのでしょうか？』

織斑の名を聞いたためか、スクリーンに投影されている織斑なつきの顔が、理想の姿たる織斑千冬と重なった。

『いや、違う。情報によると彼女は記憶喪失になっており、自分の名前と極僅かなISの情報以外何も覚えていないらしい。彼女がオリムラの名を名乗っているのは、彼女の身元保証人にチフユ・オリムラが名乗り出たからだ。便宜上借りているだけだろう。——しかし、チユフ・オリムラと言いつ、イチカ・オリムラと言いつ……オリムラの名を冠する者達は一癖も二癖もあるのだな』

そう言つて大佐は肩をすくめた大佐に対し、ラウラはじつとスクリーンに投影された彼女を顔を見つめ続けた。

(織斑一夏……教官の輝かしい経歴に傷を付け、栄光を奪った元凶……)

アリーナの発進口から『白式』を装着した一夏を見下ろすラウラ。その視線には怒りと憎しみが籠っている。

こうして映像ではなく、自分の眼で見てラウラは実感する。自分の奥。暗闇よりも深い闇からどす黒い感情が湧き上がってくる。今すぐにでも羽虫の様に容赦なく叩き潰してやりたい衝動に駆られた。

(そして——あの圧倒的な『力』の体現者たるISを操る操縦者、織斑なつき……)

視線をちらりとなつきに向ける。その視線は一夏のように強い感情は秘めていない。いや、正確には一種の憧れの様な視線にも見えただ。だが、今は関係ない。視線を再び一夏に向けた。

「織斑一夏」

ISの開放回線で呼ぶ。名前を呼ぶのも嫌だった。

「……なんだよ？」

緊張した顔の一夏。隣にいたなつきが、「何か見られていたような……気のせい？」と呟きながら首をかしげていた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

『シュヴァルツェア・レーゲン』の実稼働データ収集、そして織

斑なつきの調査がIS学園入学の目的だが、それはあくまでもドイツ軍少佐ラウラ・ボーデヴィツヒとしての任務だ。今の自分はその職務を忘れ、ただのラウラ・ボーデヴィツヒとしてここにいて、あの羽虫を叩き潰す為にいる。

容赦なく、徹底的に叩き潰す。『出来そこない』の烙印を押され、全てが絶望に染まっていた自分に価値をくれ、そして憧れすら与えてくれた象徴を壊した外敵など、存在しているだけで吐き気がする。

「イヤだ。理由がねえよ」

視線を外す一夏。

ふざけた事を。ラウラの眼に更なる苛立ちと怒りが籠る。

「貴様にはなくても私にある」

その苛立ちと怒りはさらに肉体にまで現れる。知らず知らずの内に、ラウラは自分を拳を握り潰すかの如く、強く握り締めていた。ぎしりつと『シュヴァルツェア・レーゲン』のマニピュレーターが軋んだ。

「また今度な」

「———そうか。ならば———戦わざるおえなくしてやろう！」

抑えつけていた怒りと苛立ちが弾け飛んだ。

ラウラは一瞬で安全装置を外し、専用IS『シュヴァルツェア・

レーゲン』の右側に設置されている大口径レールカノンの砲口を一夏へと向け、実弾を発射した。

「！」

だがその弾丸は一夏に直撃することなかった。邪魔者が入ったのだ。傍にいたシャルル・デュノアの第二世代型IS『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』が割って入り、左腕にシールドを展開して防いだのだ。放たれた実弾を明後日の方向へと弾き飛んだ。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな？」

同時に武器を呼び出したのだろうか、邪魔者は右腕に六一口径アサルトカノン『ガルム』を構えていた。

「貴様……」

濁流の様に押し寄せる負の感情。ラウラは忌々しげに邪魔者を見降ろし、鼻で笑った。

「フランスの第二世代型^{アンティーク}如きで私の前に立ちふさがるとはな。身の程を弁えろ」

照準を邪魔ものに向けるラウラ。

「未だに量産型の用途が立たないドイツの第三世代^{ルキ}よりは動けるだろうからね。そっちこそ、常識が分からないのかな？ ISを装着していない人間が傍にいるのにそんな大口径実弾砲なんて撃った

らどうなるのか……子どもでも分かると思うけど？」

ラウラもそうだが、シャルルも負けていない。静かに互いが睨み合う。

そんな中、ラウラはこの邪魔者が予想以上に出来る事を分析していた。武器の呼び出しの速度がかなり早い。通常一秒から二秒かかる量子構成をほぼ一瞬で、照準を合わせると言う動作も合わせて行っている。手ごわい相手であろうが、自分と専用機『シュヴァルツエア・レーゲン』の敵ではないと確信している。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス。出席番号を言え！』

「……ふん。今日は引こう」

担当の教師だろう。無視してこのまま一戦交えてもいいが、色々と面倒臭い事になりそうだ。『シュヴァルツエア・レーゲン』の戦闘態勢を解除して、ラウラは一夏達に背を向ける。

だが、直ぐに立ち止まった。妙な気配がある。あの邪魔者でも羽虫でもない。

誰だ——？ と思う振り返り、直ぐに理解し、僅かに眼を見開き驚いた。

——周りが驚いて戸惑っている中、織斑なつきだけが薄い笑みを浮かべ、ラウラを見つめていた。

その笑みに見覚えがある。象徴たる織斑千冬が昔、実戦訓練前で

見せた寧猛な感情を内に秘めた笑みと酷く似ていた。

ラウラが去ったと同時に、シャルルも機体の戦闘態勢を解除して、いつもの人懐っこい笑みで一夏となつきに声をかけた。

「一夏、なつき。二人とも大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「ありがとシャルル。流石はフランスの代表候補生♪ ただ驚くだけで何の行動を起こせず、赤い染みになるとこだった一夏を良く助けたわ。グッジョブ！」

「……うつつ、返す言葉がない」

がつくりと肩を落とし落ち込む一夏と、シャルルに向け親指を立ててグーサインを送るなつき。

「あははっ、仕方ないよ。一夏はISに乗って日も浅いし、経験も少ない。反応できないのは当然だよ」

「だそうよ。良かったわね一夏。シャルル先生が実に不出来な生徒思いの優しい先生で」

「これから精進しますので、ご指導のほうよろしくお願いします……」

「くすくすつ。まあ、期待しているよ一夏」

和やかな空気が流れる。

「それにしてもアンタとボーデヴィツヒの間に何があったわけ？
あの眼……かあくなり深そうよ？ 流石にアレを見ちゃうと、気になって仕方ないわ」

「うん……確かに。気になるけど、一夏が話したくないなら聞かないよボクは」

「……わりい。ちよつと言えねえよ……」

一夏は困った顔で言葉を返した。

ラウラがあそこまで敵意を自分に向ける理由——その答えを一夏は掴んでいた。

ドイツ軍。そして千冬を『教官』と呼ぶ意味。先程の会話。そこから導き出される答えは簡単だ。ラウラは織斑千冬の強さに惚れ込み、そして憧れているのだろう。そしてその憧れの織斑千冬の経歴

を傷付けた織斑一夏を許せないのだ。

この件に関しては一夏自身、千冬の負い目がある。何せ自分が誘拐されなければ、千冬は大会二連覇と言う偉業を成し遂げたのだから。

「——だが、それはそれだ」

小さく自分に言い聞かせるように一夏は言った。

確かに自分は姉の経歴に傷を付けた。だが、それでラウラと戦うのは少しお門違いと言える。少なくとも一夏には、それを理由にラウラと戦う気にはなれなかった。

「これは……荒れそうね。クラスリーグマッチ。一夏、骨は拾ってあげるわよ」

「不吉な事言つなよ。それにアイツと当たると決まったわけじゃねえだろ？」

「そうかしら？ 一回戦でいきなりぶつかると事あり得ない話じゃないわよ？ 運命のいたずら……神様は思いの外退屈だから、こう言う所で楽しみを得ているのよ。——まあ、アンタとぶつからなかったら、私が片づけてあげるわ。ええ、そりゃあもう徹底的に殺っちゃうわよ。くっくくく……」

「……なつき。もしかして怒ってる？」

「怒ってないと思うシャルル？ いきなり発砲してミンチになる所だったのよ？ 私、やられたら兆倍にして返すのが信条なのよ」

につこりと満面の笑みで答えるなつきに対して、一夏はぞくつと全身に寒気が奔った様に体を震わせた。

女って怖い……な。と心の中で呟いた。

深夜。なつきは一人、夕方まで一夏達と訓練していた第二アリーナにいた。本来ならこの時間に入る事は禁止されているのだが、少し試したい事があるので罰則も覚悟で侵入していた。

「……」

アリーナに人の気配がない事はISのセンサーで確認済み。またアリーナ周囲も同様だ。

無言で右手に嵌めていた手袋を取る。右手の甲に輝く無色透明な宝玉。なつきのIS『ナイツ・オブ・ラウンド』が待機状態で埋め込まれている。

「『ナイツ・オブ・ラウンド』……」

呼びかけた。その瞬間、その言葉を待っていたように『ナイツ・

オブ・ラウンド』が起動し、なつきの体にISが装着される。

その姿はIS学園の生徒、そして教師陣を戦慄させる性能を示した『白騎士』に似た姿ではなく、『ナイツ・オブ・ラウンド』初期の姿。全ての基礎となる原典。

白を基本として、アクセントに赤色が入った無骨なイメージが強い形。言ってしまうえば、一夏の『白式』を簡略化させたような感じだった。

——思い出した事がある。

自分の事は相変わらず思い出せないが、この『ナイツ・オブ・ラウンド』の事は断片的だが思い出して来た。たびたび放課後に呼び出され、教師陣に質問され続けたの切欠になったのかは定かではないが、この『ナイツ・オブ・ラウンド』が『白騎士』に似た姿に変形する理由は完璧に思い出した。

似ているのは当然なのだ。何せ『白騎士』のデータをベースに最新技術は当然の事、IS条約で禁止された技術まで流用して作られているからだ。

何故『白騎士』の姿に似せたのか、何故本来必要のない全身変形と言うプロセスを組み込んだのか未だ思い出せないままだが、この理由も徐々に思い出す事だろう。

「とりあえず……この状態なら問題なく動かせる……『白騎士』にも変形しようと思えば『ナイツ・オブ・ラウンド』は応えてくれる。でも——」

制御は出来ないだろう。『ナイツ・オブ・ラウンド』は、蓄積した膨大な戦闘経験と戦闘情報、そして操縦者達の特徴。その三つを元に、操縦者達の動きを再現して戦うのだろう。共に生き、共に闘い続けたなつきと言う存在を守る為に。

「嬉しいんだけど……ちょっと歯がゆいかな。守ってくれるのは嬉しいんだけど、やっぱり私は守られるなら、一緒に戦いたいな。アンタと……」

今まで自分と『ナイツ・オブ・ラウンド』を繋いでいた大切な繋がり、“絆”が薄らいでいるのが分かる。何が原因なのか、記憶を失ってしまった為にその“絆”が薄らいってしまったのだろうか。

やはり自分にしかり、ISにしかり、鍵は記憶だ。それを思い出さないと全てが始まらない気がする。

だが何故だろう……。全て思い出したい気持ちは確かにあるのに、それを心の中で恐れている自分がいる。思い出してしまえば、何か大切なモノを失ってしまいそうで怖いと感じている。

「……ああ。難儀よね」

ふと、夜空を見つめ、呟いた。記憶を失ってしまったのはショックなことではあるが、起こってしまった事を悔やんでも仕方ない。ならポジティブに考えて、思い出すのを待っていればいい。思い出せないのなら、また作ればいい。記憶を。そして“絆”を。

——でももし、今すぐ記憶の一部が取り戻せるのなら、戻したい記憶がある。

なつきが呼ぶ”あの人”の記憶。

あの人と言った言葉は僅かだが思い出した。だがどんな声で、どんな顔で、どんな姿なのか未だに思い出せない。それが何より辛かった。

「……ほんと……難儀よね……」

悲しげに呟く声は静かに夜の闇に消えていった。

第六話（前書き）

今回は原作を忠実に再現みたいな感じですよ。

ちょっとテンションダウン。もうすぐ旅行に行きますので、しばらく更新できないと思います。

第六話

「……もう完全に持ちきりよね。優勝商品の噂……」

月曜日の朝。普段とは違う騒がしさを見せているクラスを見渡し、織斑なつきは窓側の自分の席に腰を下ろす篠ノ之箒に目を向けた。

「どーすんの？ 箒？」

「……」

箒の隣の席に腰を下ろし、頬杖をつくなつき。表面上こそいつもの箒だが、噂話と驚きの声上がる度、ぴくぴくと口許がひきつっていた。

それもその筈だ。噂話の内容である『学年別トーナメントに優勝したら織斑一夏と付き合える』と言うのは、本当は箒と一夏だけの取り決めだったはずなのだ。だが、何がどうなって、それが優勝商品となってしまうたのか。人の噂は侮れないわね。となつきは同情的な視線で箒を見つめた。

ちなみにその辺りの顛末を知ったのは昨日の夜で、なつきが女子の間で広まっている噂を話したところで箒が驚きのあまり、ぽろぽろと言ってしまった為である。

（まあ、色恋事に不器用な箒にしてみればよくやったほうだけど……気になるのは一夏がその意味をちゃんと理解しているかどうかどう

かね。近年稀に見る天然級鈍感野郎だし……大方一夏は買物に付き合ってくれ程度にしか思ってたなかったりして……」

と言うかそっちの可能性のほうが確実に高いだろう。百人の男が気づくであろう典型的な女の子のアプローチですら、あの男は気づかないのだから。

じつと算を見つめ、返事を待つ。その時、一際大きな驚きの声が上がった。

「そ、それは本当ですよ!？」

登校して来たセシリア・オルコットだ。クラスの情報通の女子が話しかけて教えてもらったらしい。

「はい。強力な対抗馬がゲートに入りましたー」

横目でどこか嬉しそうに驚くセシリアを見て、声を上げる。ぴくぴくつと算の口許が歪み、机の上に置かれた両手を握りしめた。

「ちよつと! 学年別トーナメントの噂で聞きたいことがあるんだけど!」

教室のドアを勢いよく開けて入ってきたのは、隣のクラスの凰鈴音だ。彼女もまたセシリアと同じグループに入り、話し込む。

「はい。もう一頭並びましたー。どちらも強力な血統種の馬に乗っております。算さんのオッズが見る見る下がっていきまーす」

「……うるさいぞ。なつき」

静かに箒が口を開いた。声が震えている。

「誰がいようと関係ない。優勝すればいいだけの話だ」

無然とした表情で答える箒。それに対してなつきは頬杖を付いたまま、諭すように口を開いた。

「まあそうなんだけどね。でも、箒が使うISは『打鉄』でしょ？ 同じ土俵ならアンタの勝ちは固いわ。でもね、腕もISの性能も上の連中が少なくとも三人はいるのよ。どーやって優勝するつもりよ？」

「そんなものやってみなければ――」

「確かにね。何事にも挑戦するのはいいことよ。でも、アンタだって自覚しているはずよ。生身ならともかく現状なら箒が一番弱い」

「つつ――！！」

かつと頭に血が上ったが、なつきの言うことに納得している自分があるので反論できなかった。

その事実には嫌でも分かっていた。搭乗者の技量はともかくとして、ISの性能は稼働時間において正比例する。箒のIS搭乗稼働時間など、セシリア、鈴音、ラウラに比べれば微々たる数字だ。既にスタートラインで大きく引き離されている。

「箒。それでもアンタは優勝を目指すの？」

にまにまと意地悪い笑みを浮かべ、どこか含みのある言い方を
するなつき。

試している。織斑なつきは篠ノ之箒を試している。このスター
ラインが大きく違うハンデ戦を勝つ気持ちがあるのかどうかを。

「無論だ。例え誰が相手だろうと、私は戦って優勝するだけだ。
今回はあの時のようには——っ！」

何か嫌な事を思い出したのか、箒が顔を歪め、頭を振った。

「ふーん……何かアンタも結構色々と背負ってるみたいねー。
それにしてもそんなにはつきり宣言できるぐらいなら、一夏を襲っ
ちやうぐらいの気概を見せなさいよ」

「なあっ……?!」

耳打ちされた言葉に思わず大きな声が漏れた。クラスメイト達の
視線が集中するが、箒は何でもなかったように視線を机に戻す。

「なつき。貴様何を破廉恥な事を——!?!」

「冗談よ冗談。そんな事が出来るぐらいなら、初々しく付き合っ
てくれなんて言いに行くわけないわよね」

けらけらと笑うなつき。僅かにむつと顔を歪ませた箒。

相変わらず人をおちよくるのが好きな奴だ、と心の中で呟いた。

「まあ、冗談はこのぐらいにして——箒。アンタ、剣は使った事ある？」

「剣？ 刀ではなくか？」

「そう。両刃の剣」

「戯れに少し触った事があるぐらいだが……何故だ？」

眉を潜める箒に対し、なつきはにこりと頬笑みを返した。

「最近になってようやく私のISの使用許可が下りてね。だから私のIS『ナイツ・オブ・ラウンド』の武器を貸してあげるわ。名前は「カリバーン」。多少のシールドエネルギーの消費で、超高出力のエネルギー刃を展開出来るロングソード状の実体剣。さすがに「雪片式型」のような一撃必殺な威力はないけど、『打鉄』に装備されている実体剣よりはるかに使えると思うわ」

「お前のISと言うと……あの『白騎士』のか？」

箒は僅かに強張った表情で小声で尋ねた。

一応表向き、あのISは未だに学園の地下施設で保管、搭乗者は隔離されている事になっている。ちなみになつきのこの事実をあっけらかんな感じで箒に話し、一騒動起こしている。

「うーん。どうなんだろうね。そうかもしれないし違つかもしれないけど……まあ、とにかく安全は確認済みよ。で、どうする使う？」

箒は少し悩んだ。

IS性能、そして搭乗時間で既に大きく引き離されている。だから少しでもその差を補えるなら補いたい。だが問題なのは、その補う部分があのかの正体不明の圧倒的性能を示した『白騎士』の武器かもしれないと言う不安からだ。

（だが、多少の危険は呑まなければ優勝は難しいか……）

箒は決断し、一つ頷いた。

「分かった。ありがたく借りる事にする……だがいいのか？ 貸してくれるのはありがたいが、お前も出場するのだろう？」

「いいのよ。元々やる気も無かったし、とりあえず評価を貰えるぐらいの戦闘して、負けるつもりだったしさ。……今回は箒が不利だしね。応援しているわよ」

「……すまない。感謝する」

「どういたしまして。それじゃあ放課後に一緒に練習しよ。どうせ今日も貸出申請しているんじゃない？」

「ああ。恩に着る」

小さく頭を下げる箒に対し、満足げな笑顔で答えるなつき。

その時、教室のドアが開き、絶賛噂中の人物、織斑一夏がシャルル・デュノアと入ってきた。

「おはよう。朝から何を話してんだ？」

「「「きゃああああ！？」」」

思わず取り乱した悲鳴を上げる女子の面々。そして蜘蛛の子を散らしたように解散した。一夏は女子たちのその反応にきょとんとして、セシリアと鈴音に近づいた。

「で、何の話だったんだ？ 俺の名前が出ていたみたいだけど？」

「う、うん。そうだったけ？」

「さ、さあ。どうだったかしら？」

鈴音、セシリアが素知らぬ顔を話を逸らそうとする。

（そりゃあ本人に話せないわよね。初な連中ばかりだし……）

どこか呆れた表情でなつきは観察する。そうして、鈴音とセシリアは無理やり話題を切りあげ、一夏から離れていく。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

一夏がシャルルと顔を見合わせ、首を傾げる。

（……ピコーン。言い事思いついちゃった。）

文字通り頭の上に電球を輝かせたなつきがにんまりと笑みを浮か

べ、席を立った。

「来たかなつき」

「織斑先生の呼び出しならたとえ火の中水の中ですよ」

昼休み。おなじみのメンバーで食堂へ向かおうとした矢先、放送で千冬から呼び出しを受けたなつきは生徒指導室にいた。

「それで何の話ですか？ あつ、織斑先生からの愛の告白なら喜んでお受けしますけど」

「話と言つのは他でもない。月末の学年別個人トーナメントの件だ」

「あゝ……無視ですか。少しは乗ってほしかったなゝ……」

頬を膨らませ、むくれるなつき。千冬が酷く呆れた表情でため息を吐いた。

「お前の下らない冗談に付き合うのは時間の無駄だ。話を戻すぞ。先日連絡したようにお前のISの使用許可が下りたのは、この月末の学年別トーナメントに合わせての事だ」

「あー……やっぱりそうですか……」

頬を掻きながら、どこ面倒臭そうに眼を細めた。

「……分かっているみたいだな。使用許可が下りた理由を」

「まあ、それなりに。大方、自分の所に手に入れられないなら、せめてデータだけでも手に入れようって腹でしょう？ やだなあ。私、見世物小屋の珍獣じゃないですよ。ぶんぶん！」

「良い様によつては珍獣だろう。あんな馬鹿げたISを持っているのだからな」

「言われてみればそうかもしれないですね。あはははっ」

「能天気な奴だな。——それで、記憶はどのくらい戻った？」

僅かに眼を細める千冬。

なつきの処遇に関しても今も尚、極秘裏に国際社会の立場で紛糾している。

何せ現状のスペックを大幅に凌駕し、さらには最高の機器を揃えたIS学園でも解析できない代物なのだ。高性能なISが一機あるだけで、その国の軍事力や発言力は大きくなる。各国が放っておかないのは当然のことだった。

「いやあ、それがさっぱり。全然戻る気配なしです。何か切欠がないと戻らないんじゃないですかね？」

あっけらかんに答えるなつき。

「……そうか。お前のIS『ナイツ・オブ・ラウンド』の開発元はおそらくあいつだろうが……お前とあいつの関係が今一つ分からんな」

「あいつ？ ああ、箒のお姉さんですね」

「それ以外に誰がいる？ あんなふざけたISを作れるのはアイツぐらいだ」

そう口に出した千冬だったが、今一つ確信を持ってないでいる。その理由は本来必要のない変形のプロセスを組み込んだ上、その変形後の姿を『白騎士』にしたのか。その理由が全く見当がつかなかったのだ。

「なるほどなるほど。さすがは織斑先生……と言いたい所ですが、

それは違つと思いますよ」

「ん？ 妙な言い回しだな。どういうことだ？」

「簡単ですよ。私、不思議と篠ノ之束の事——殺したいほど嫌いですから」

「……」

薄く微笑んで答えたなつきの顔。その顔は底知れぬ憎悪と怒りを隠しているように見えた。

「第〇アリーナに行こー」

「ああ」

ショートホームルームが終わってしばらくして、なつきと第〇は手

早く鞆に荷物を入れ、席を立った。朝に約束したようにこれからアリーナで自主訓練を行うのだ。

「おい。一夏。アンタもアリーナに行くでしょ？一緒にいかない？」

「おおいぜ。シャルルも一緒だけどいいか？」

「もちのろん。シャルルなら大歓迎よ」

一夏、シャルルと合流して一年一組のクラスを出るなつき達。廊下を歩く生徒達の大半もおそらく向かう先はアリーナだろう。学年別個人トーナメントで良い評価を貰えれば、後々の進路に有利だ。もしかすると観戦に来た政府関係者、もしくは企業の眼にとまりれば、IS操縦者の憧れ、専用機持ちになれる可能性だってあるのだが、まだその辺りの重要性を理解していない一年生は、専ら優勝賞品目当てに奮闘している。

「一夏。訓練のほうはどう？少しは上達した？」

「んー、どうだろう自分では分からねえよ。ただなつきのアドバイスはちゃんと聞いているぜ。なつ、シャル？」

「うん。毎日熱心に訓練しているよ。とりあえず射撃武器の特性に関してはもう大丈夫かな」

「へえ……流石は織斑千冬の弟ね。褒めてあげるわ。ご褒美にキスでもしてあげようか？」

意地悪く笑みを浮かべているなつき。一夏の反応はなつきの想像

通り、顔を赤くして言い返した。

「ばっ……いらねえよそんなの！」

「あらそう？　なら箒が……」

「な、なな何故私がしなければならない！　ふざけるな！」

相変わらず素直じゃないわね。こう言う時にしとくもんよ。と思いつつ、なつきは肩をすくめ、そのノリでシャルルに視線を向けた。

「じゃあシャルル……」

「うえっ！？」

「……おい待て。何よそのまんざらでもない反応は……？」

年相応の少女の様な反応に僅かに戸惑いの表情を浮かべるなつき。

「えっ……！？　そんなことないよ！　何で男の僕がい、一夏にき、ききキスをしなくちゃいけないのでございますか？」

明らかに動揺を隠しきれないシャルル。一瞬の沈黙。

なつきはがしっと一夏の胸ぐらをつかみ、ぎろりと睨んだ。

「……おいこら一夏。アンタ、シャルルに何をした？」

「な、何もしてねえよ！　と言うか、胸ぐら掴むな！」

「ふざけんじゃないわよ。じゃあ何で、少女コミックによく出てくる清楚で素朴そうな少女が昨日突然意中の人の言い寄られて友達の何気ない質問に動揺する様な反応をシャルルがしているよ?!」
なに、アンタ。まさか女に興味がないの!? だからシャルルみたいな男の娘に手を出したわけ!? いや不潔! 変態! まさかまさかと思つてたけど、アンタそつちの人間だつたわけ!?

「何寝ぼけた事言つてんだよ!? お前ちよつと最近暴走気味だぞ! つーか、アツチの人間つて何だよ!?

「い、一夏……そ、そうだったのか……!?

愕然とした表情のまま、よろよろと後ろに後退するほつき。

「ああっ?! 何か筈がとんでもない勘違いしてる気がする。シャルル、助けてくれー!」

「えっ、あっ、うん。そのボクと一夏は何にもな——!」

「シャルル。アンタ、朝起きたらいつの間にかベッドに一夏がいたとか、お風呂とか見られなかった!?

「えっ——っ!」

ぼんつと顔を赤くするシャルル。その赤面の意味は肯定と受けざるえない。

顔を青くする一夏。ぎらりと眼を鋭くさせるなつき。色んな意味で真っ青になって、信じられないとばかりに首を振る筈。

「一夏あああーーーーー！　これだけ魅惑的な女の子の世界で男の娘に手を出すってどういうことよーーーー！？」

「一夏……そうか……そうなのか……！」

「違う！　詳しい理由は話せないがこれには深い訳があああーーーーー！！！」

と、そんなカオスな空間を形成されていく中、突然周りが騒がしくなった。生徒達が駆け足で本日自主訓練として開放されている第三アリーナへと向かっていく。

「——第三アリーナで模擬戦がやってるって！」

「——代表候補生同士の模擬戦なんだって！」

「……えっ？」

思わず四人が口を揃えて言った。

（ふん。この程度か……。やはり私の敵ではないな）

ドイツ第三世代IS『シュヴァルツェア・レーゲン』を装着したラウラ・ボーデヴィツヒは実につまらなさそうに、眼前で地べたを這いつくばる有象無象の二つ——イギリスの代表候補生セシリ

ア・ウォルコットと中国代表候補生凰　鈴音を見下ろした。

相手が代表候補生と言うからには、少しは楽しめるだろうとラウラは思っていたが、戦闘を開始してしばらく、それがとんだ勘違いだったと判断した。

弱い。自分と、そして『シュヴァルツェア・レーゲン』の相手ではない。

やはりあんな下らない何の価値もない種馬を取りあう雌共だ。僅かながらの期待をした私が馬鹿だった、とラウラは冷めきった心と瞳で起き上がる二人に追撃などせず、再び戦闘態勢を取るまでじっと見つめていた。

鈴音とセシリアは軽く眼を合わせ、息を合わせたようにラウラに接近する。

「くらえっ！」

最初に仕掛けたのは鈴音だった。彼女の中国第三世代IS『甲龍』の両肩が開く。搭載されている兵器は第三世代型空間圧作用兵器・衝撃砲「龍砲」。空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す仕組みで、砲弾及び砲身すら見えず、また砲身の稼働限界角度がないのが特徴だ。そして鈴音はその「龍砲」を最大出力で発射した。訓練機のアーマーなら一撃で沈められる威力だが、それは全て当たればの話だ。

「無駄だ。この『シュヴァルツェア・レーゲン』の停止結界の前ではな」

ずっと右手を突き出し、意識を集中。前面に『シユヴァルツェア・レーゲン』に装備された第三世代型兵器「AIC」のエネルギー波を湾曲上に展開、「龍砲」の見えない砲弾を動きを停止させる。そして砲弾は自らのエネルギーで自壊し、爆発して消失した。

「くっ！ まさかこうまで相性が悪いなんて……！」

鈴音が悔しげに呟いた。

相性が悪いどころの問題ではない。一対一では確実に天敵と言えるレベルだった。

見えない砲身、見えない砲弾は確かに脅威だ。砲身が見えなければ発射角度が見えない上、弾道を予測出来ない。砲弾が見えなければ迎撃も出来ない。つまり射撃兵器としては「龍砲」はかなり高性能な兵器に入るが、何処まで言ってもその「龍砲」が射撃兵器の力テゴリーから出ない以上、対象を任意に停止させる事の出来る「AIC」には勝てない。

「ふっ……」

ラウラが反撃に転じる。両肩に搭載されたワイヤーブレードを鈴音に向け射出した。本体とワイヤーで繋がれている以上、それはラウラの意志に応じて縦横無尽な機動を描き、迎撃射撃の間を蛇のようにして潜り抜け、ついには鈴音の右足を捉えた。

「そうそう何度御させるのですかっ！」

（喋るぐらいならさっさと攻撃に転じろ。雌が！）

セシリアが鈴音を逃がす為、射撃を行いながら同時にビットを射出、ラウラへと向かわせる。

「ふん……理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

驟雨の如く降り注ぐレーザーをかわしながらラウラは言った。射撃精度は確かに見事なモノだが、ビットの動きはまだまだだ。どこかまだぎこちなさと直情的な動きがある。予測はたやすく、同時にその先も見抜きやすい。

迫ってくるビットの動きを止める為、ラウラは腕を交差させて全方位に「A I C」を展開。ビットはその慣性を奪われ、空中に固定された。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

戦いとは常に二手、三手持っていないければ生き残れないし、勝てるわけがない。セシリアが放つ狙撃を、ラウラは大型レールカノンの砲撃で相殺。そしてセシリアが次の行動を起こす前に、ワイヤーブレードを操作。先程捕まえた鈴音をぶつけてその動きを止める。

「きゃあああー!!」

激しく衝突し、姿勢を崩した二人はそのまま地面に激突。盛大な土煙が巻き起こる。

「ふんっ……」

つまらない。終わらせるか。と、ラウラは黒い流星となって土煙を切り裂き、二人に接近した。奇襲機動にして格闘戦闘を得意とする者ならば習得が必須な『瞬時加速』で迫る。

「終わりか？ もう少し楽しませてくれると思っていたが……やはりその程度か」

「このっ……！」

鈴音が「龍砲」に砲弾エネルギーを充填させる。それを見たラウラは焦ることなく、呆れた表情を浮かべ、大型レールカノンを砲口を「龍砲」へと向ける。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

ラウラは大型レールカノンを発射。発射寸前だった「龍砲」に直撃し、爆散した。

「終わりだ」

両腕に装着されたプラズマ手刀を展開した直後——その顔は初めて驚きが支配した。

「させませんわ！」

セシリアがウェスト・アーマーに装着された弾道型ビットをラウラに向けて射出したのだ。

視界を埋め尽くす炎と耳を劈く轟音。ラウラの姿がミサイルの爆

炎に包まれた。

「無茶するわね。アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが——はっ！」

セシリアが言葉を言い終わる前に、セシリアと鈴音にワイヤーブレードが巻き付いた。

「なっ!?!」

「嘘、でしょう!?!」

黒煙が張れる。そこには何事もなかったように浮遊するラウラの姿。

「今度は——私の番だな」

右手にはセシリアを拘束するワイヤー、左手には鈴音を拘束するワイヤー。ラウラはにやりと残忍な笑みを浮かべ、『シュヴァルツエア・レーゲン』の推進力を加え、二人を一気に空中へと引っ張り上げた。

「くうっ!?!」

「ああっ?!」

文字通り空中へと放りだされた鈴音とセシリア。

「こういうのは体験した事がないだろう——!」

十分な高度から一気に『瞬時加速』で下降。そしてそれに釣られる様にワイヤーブレードで繋がった二人を地面へと叩き付けた。慣性に重力を加えられた一撃は凄まじく、セシリアと鈴音は巨大なクレーターを作り上げた。

「うつ……が……」

「つ……あ……」

あまりのダメージに動けない二人。ワイヤーブレードは繋がれたまま、その姿はまさに地べたに這いつくばる雌犬だった。

「ふん。これで終わりだ」

大型レールカノンを起動させ、狙いを定める。最初は金髪の雌犬だ。

「ではな」

大型レールカノンが発射される寸前、白い何かが間を通り過ぎ、二人を拘束していたワイヤーブレードを断ち切った。

『——あらあら。銀髪ちゃんちくりん。これはちょーとばっか

しやりすぎじゃない。生徒指導室に呼ばれて反省文書かされるわよ
ー」

通信に入ってきた声。そして視界の隅で浮かぶ白を基本色とした
ISを纏う一人の少女。

「織斑なつき——」

『はあーい。呼ばれて飛び出てじゃーん。なつきちゃんの登
場でーす』

口調こそふざけているが、浮かべている笑みは、底知れぬ獰猛さ
を漂わせる笑み。

自然とラウラは笑みを浮かべた。

——少しは楽しめそうな相手が出てきた。

第七話（前書き）

旅行から帰ってまいりました。

またのんびりと更新していこうと思います。

第七話

「なつき！？ あいついつの間に――！」

観客席で見えていた一夏は驚きの声を上げた。ラウラのあまりの暴拳に頭に血が上がり、『白式』で観客席を覆うフィールドを壊して止めようとしたまさにその瞬間、さっきまで一緒にいた織斑なつきが専用機『ナイツ・オブ・ラウンド』を纏って、ラウラの暴拳を止めたのだ。

「一夏。僕達も行こう！」

「っ、ああ！」

シャルル・デュノアの声に一夏は直ぐに反応し、共にピットへと向かうべく走り出す。ラウラの実力はかなりのものだ。何せセシリアと鈴音が二人同時に相手しても互角以上の戦いをしたのだ。なつきの実力は未知数だが、一人では確実に勝てないだろう。

「くっ……私にも専用機があれば……」

篠ノ之箒は悔しげに去っていく二人の背中を見つめ、アリーナへと視線を移す。専用機を持たない箒は直ぐにISを準備できない。

たまらなく悔しかった。何もできない自分を、そしてかつての自分の姿をしているラウラ・ボーデヴィツヒの暴拳を止められない自分に。

「く、そ……」

拳を握りしめ、見ている事しか出来ない自分が腹立つにはいられなかった。

「織斑なつき。今度は貴様が私の相手か？」

またとない相手だ。とラウラはほくそ笑んだ。

今も尚、ラウラの脳裏に焼き付くあの白亜の騎士の姿。見せた力は全体のほんの一部にしか過ぎない。だがそれでも圧倒的な力、そして決して他社を寄せ付けぬ強さを見せた。

それが映像ではなく、この眼で見れる。この手で確かめられる。その言い様のない興奮が体の奥からじわりじわりと湧いてくる。

「お望みなら相手してあげてもいいけど……今はちょっと待ってほしいかな。セシリアと鈴音を安全な場所に移動したいんだけど？」

ちらりと視線を地上へと向ける。ISが解除され、セシリアと鈴音が力なく横たわっている。

「知らん。そんなゴミは放っておけ」

「あらあら……仮にも同級生でしょ？　もうちょっと他人を思いやる事はしない訳？」

「専用機持ちでさらに二人掛かりでも負ける奴らなどゴミだ。死のうが生きようが私には関係ない話だ」

「冷たいお言葉。友達無くすわよ。ちんちくりん」

「不要だ。そんなモノ」

私に必要なのは、力だけだ。ラウラはその言葉を口にせず、大型レールカノンを照準、発射した。腹に響く轟音と宙に舞う銀色の空薬莖。なつきはラウラの初撃を察していたのか、ふわりと羽毛の様な軽やかな機動で砲撃をかわした。

「せっかちなね。女はどうしり構えるもんよ。何事にもせっかちだと男とうまくいかないわよ」

「いつまでその減らず口が叩けるか見物だな」

ぐにやりとラウラの視界がぼやける。『瞬時加速』に見られる典型的な現象だ。一気にトップスピードまで加速したラウラがなつきと距離は詰める。なつきは高度を上げ、長剣型の実体剣「カリバーン」を構え、真っ向から近接戦闘を挑む。

「見せてもらおうか。そのISの強さを！」

「ISじゃなくて私の力でしょ。ちんちくりん！」

白と黒が空を舞う。華麗にして苛烈な二つの流星は、お互いの存在が目障りとはかりに交差する度に激しい火花と激突音を奏でる。立ち止まって打ち合うなんて愚かな真似はしない。そんな事をすれば『シュヴァルツェア・レーゲン』の「AIC」の餌食だ。故に彼女との一対一の近接戦闘はお互いに高速で飛翔し、交差する瞬間に刃を交えるしかない。

（——なるほどな）

八回。刃を交えた後、ラウラはどこか感心した眩きを心の中で漏らした。

イギリスの『ブルー・ティアーズ』。中国の『甲龍』。そしてドイツの『シュヴァルツェア・レーゲン』。俗に言う第三世代ISの特徴は、第二世代ISの特性及び性能を強化しながら、さらには操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目指した世代だ。オールレンジ攻撃可能なビット兵器「ブルー・ティーズ」。空間に圧力をかけて砲身を作る「龍砲」。対象を任意に停止させる「AIC」。ほんの二十年前までは机上の空論の域を出なかった兵器が実用化され、ISの性能は飛躍的に向上した。しかし言いかえれば、それら第三世代ISに搭載されている特殊兵器があるからこそ、第三世代ISは高い性能を持っている。

ならば今戦っている『ナイツ・オブ・ラウンド』が、第三世代系ISかと聞かれれば違つとラウラは答えるだろう。あの『白騎士』に変形する事はさておいて、今の『ナイツ・オブ・ラウンド』はどちらかと言えば、兵器として完成を目指した第一世代ISを純粹に強化していったタイプだ。特殊兵器などの余分なモノを搭載せず、ただただISの基本的な部分、防御力、機動性、出力、柔軟性などの機体性能を中心に強化している。おそらく第三世代用の特殊兵器

を抜いた各国の第三世代ISと比較すれば、間違いなく『ナイツ・オブ・ラウンド』が全てにおいて圧倒している。操縦者の操縦技術が高ければ高いほど、癖のない安定した高水準のIS。それが『ナイツ・オブ・ラウンド』だ。

そしてそれを操るなつきもまた、愚直なまでに基礎に忠実と言うか、一つ一つの動作が教本に載せてもおかしくないくらい完璧だった。接近機動、回避機動、激突時における機体のバランスの取り方と慣性の逃がし方などなど、惚れ惚れするぐらい難しい動作や手順を流れる水のように淀み無く行っている。それだけで彼女の鍛え方がラウラには手に取るように分かった。

一つ一つの動作の積み重ね方が半端ではない。それはまさに鉄を鍛えるように何度も何度も繰り返し返し、そして完成させた。こういう相手は間違いなく厄介であり強敵。そしてどんな機体でも難無く乗りこなし、機体性能を限界まで引き出して使うことが出来る。

「うおりゃあ！」

九度目の激突。肩に担いだ状態から「カリバーン」を振り下ろすなつき。その鋭く重い一撃にラウラは両腕のプラズマ手刀を交差し受けて止める。

（くっ……愚直なほど真つすぐな攻撃だが、速い——だが！）

ぎしりつと軋む両腕。ダメージはあるが、なつきの動きは止めた。握っていた両手を開き、「AIC」を発動させる。動きが止まればこっちのものだ。例えば高い機体性能、操縦技術を持っていたとしても、止まってしまえば射撃場の的と同じだ。

「貰った！」

「甘いわぁ……！」

「AIC」のエネルギー波がなつきを絡め捕る前に、「カリバー」の刀身が僅かに左右に開き、その身を淡い光が包んだ。その瞬間、受け止めているプラズマ手刀が悲鳴を上げた。

「なっ！？ パワー負けだと！？」

ハイパーセンサーに投影されるウィンドウには、形成しているプラズマ刀身の限界を示す表示。その驚きがラウラに一瞬の隙と「AIC」の集中を乱した。

「どっせえええええい……！」

「くっ！？」

ありつただけの力と膨大なスラスタ推力を加え、鏢迫り合いの状態からラウラを斬り飛ばした。

「くっ—— 舐めるなあ……！」

地上に激突する寸前、ラウラが吠え、大口径レールカノンを発射した。

「あっ、うそん……！」

回避したいが間に合わない。何とも間抜けな声を漏らしたのもつかの間、ローレンツ力で加速された弾丸がなつきを直撃。アリーナ

の空に爆炎が広がった。

ラウラが最後に放ったレールカノンがなつきに直撃した直後に、一夏とシャルルはピット発進口に辿り着いた。

地上にはもくもくと上がる土煙。そして空に広がる黒煙の中から何かが落下していく。

「なつき！？　シャルル。なつきを助けに行ってくれ。俺はセシリアと鈴を助けに行く！」

「分かった！」

それぞれISを装着し、ピット発進口から飛び出していく。

「なつき！」

シャルルが『瞬時加速』を使って力無く落下するなつきを地上すれすれのところでお姫様抱っこの要領でキャッチした。

「なつき。大丈夫！？」

声をかけるが彼女はぐったりとしていて反応を示さない。

まさか——と嫌な予感が走る。いくら絶対防御があるからといって安心は出来ない。当たり処や機体の損傷具合によっては、絶対防御を突き抜けることもある。

「なつき！　しっかりして！」

と、大声で再度呼び掛けた直後、なつきが呻き声を発した。

「いつ——」

「なつき！　無事でよかつ——！！！」

「いったあああああああああああいいいいいいいい！！！」

突然、がばつとシャルルの腕の中で起きた涙目のなつき。

「痛い！　マジで痛い！　あのちんちくりん。爆破弾（バースト弾）を装填していやがったわね！？　あー痛い！　乙女の柔肌になんてことすんよお！！！」

「あゝ……無事みたいだね……」

それだけ元気に叫べるなら問題なし。心配した自分が損したとばかりに呆れた顔を浮かべるシャルル。だがある違和感に気付いた。

（——あれ？）

それはなつきのISだった。大型レールカノンに装填される大口径爆破弾の破壊力は半端ではなく、直撃を受ければ確実にどこかしのISアーマーは破壊する。だが、彼女のISアーマーには破損らしきものが見当たらない。せいぜい欠けた程度。シールドを張って防御したのだろうか？ いや、それでもこのISの装甲は頑丈すぎないか――？

「シャルル！ あのちんちくりんは！？ もう一発叩きこまなきゃ気が済まないわ！」

むきーつと怒り狂った猿の様に吠えるなつきを見て、シャルルは僅かに湧いた疑念が消され、やれやれと言った感じで腕から下ろす。

その直後――。

「っ。シャルル！」

なつきが思いっきりシャルルを突き飛ばした。その瞬間、その間を突き抜けるように大口径砲弾が駆け抜けていった。

「ちっ！ 流石はね。もう立ち直った！」

土煙が晴れていく。既に起き上がり、こちらに向け大口径レールカノンを向けているラウラの姿があった

『褒めてやろう。だが、この代償は高くつくぞ』

ラウラがレールカノンを連射する。轟音が何度も何度もアリーナを震わせ、銀の空葉莢が無数に大地に転がってゆく。

「悪いけど、アンタの代償なんてタダ同然よ！」

放談をかわしながら、なつきがシャルルに目で合図を送る。そのわずかな合図の意味するものを敏感に感じ取ったシャルルが、両手にアサルトカノン「ガラム」を出現させた。

「シャルルお願い！」

「了解！」

「ぬっ!？」

素早くなつきの声に反応したシャルルが、ラウラに無数の銃弾を浴びせた。

「おのれ! フランスのアンティークが。私の邪魔をするなあ！」

地上を滑走しながら銃弾をかわし、右手を広げ「AIC」を展開。撃ち出された銃弾が全て、ラウラの意志に応じるように停止させる。そこで今度はなつきがにやりと笑う。

「チェック（王手）よ! 一夏あ!」

「なに!？」

ラウラは激しく焦りの表情を浮かべた。このタイミングで仕掛けられればいくらなんでもラウラでも捌けない。

「えっ、あっ!？」

だがそんなラウラの焦りとは対照的に、一夏は急に呼ばれた意味を理解はしたが、さすがに体が反応しなかった。

「なっ——しまった!？」

ラウラはなつきが叫んだ言葉の意味を理解した。そう。彼女の目的は一夏による奇襲ではなく、自分から僅かでも注意を逸らす事。

影がラウラを覆う。上を見上げるとそこには、淡い光を放つ長剣「カリバーン」を携え、垂直に落下突撃するなつきの姿。

「もう一撃い——!!」

「くっ——猪口才な真似を!」

「AIC」を停止させ、なつきの攻撃を回避することに集中する。

即決の判断だった。シャルルのダブルアサルトカノンの弾雨が、それとも一撃でプラズマ手刀を破壊した斬撃か、どちらのほうか。ラウラにとって最も脅威となるか。それは間違いなくなつきの斬撃だ。シャルルのダブルアサルトカノンの攻撃はダメージが大きいとはいえ、ダメージ量のある程度想定できる。だがなつきの攻撃はそれが出来ない。あの剣には未知の部分が多すぎる。それが理由だ。

ざんつと振り下ろされた一撃を再びラウラは紙一重でかわしきったが、代償にアサルトカノンの洗礼を受け各部を被弾した。だがダメージは予測範囲内。戦闘続行は可能だった。

「あらま……これかわすの? しつこい女みたいねアンタ

も」

「……認めてやる。お前は私が狩るに相応しい獲物だ」

——戦いは終わらない。二人が不適な笑みを浮かべつつ、
双方が武器を再度構え直した直後。

『そこまでだ』

アリーナに響く一つの放送。全員が驚いたようにアリーナの実況席へと視線を向けた。ハイパーセンサーによって拡大される。実況席にいたのは織斑千冬だった。

『模擬戦をするのは構わんが、その行動がアリーナの占有に繋がっているなら教師として放っておくわけにはいかん。この戦いの決着は学年別個人トーナメントで決着をつけてもらおう。いいな。お前達』

「教官がそうおっしゃるのであれば——」

戦う気十分だったラウラだったが、自らの理想像たる織斑千冬にそう言われれば従わないわけにはいかない。不完全燃焼に近いがそんなものは一切表情に出さず、いつもの鉄面皮でISを解除した。

「なつき、デユノア、織斑もそれいいな？」

「……了解」

「ボクもそれで構いません」

「……はい」

とりあえず承諾するシャルルと一夏だったが、なつきは不満を露にして答えた。

「ではトーナメント開始まで一切の私闘を禁ずる。解散！」

アリーナに響き渡る千冬の宣言により、戦いは幕を閉じる。

この後、一夏とシャルルはセシリア、鈴音を保健室へ。なつきと篤はアリーナに残って自主訓練を開始する。

そして六月の最後の週。学年別個人トーナメントは、とある事情により学年別タッグマッチトーナメントへと変更され、再び幕が上がることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9179s/>

I S インフィニット・ストラトス ——白の後継者——

2011年5月19日22時39分発行